



大宮図書館二〇二二年度特別展観

# 病と生みいる



大宮図書館2021年度特別展観

# 病と生きる

## 特別展観の開催にあたって

龍谷大学図書館長 竹内真彦

龍谷大学大宮図書館 2021 年度特別展観は「病と生きる」をテーマに開催致します。古来、人間は病に悩まされて来ました。人類史上、克服できた病の方が少ないのかも知れません。直近の新型コロナウイルスについても、克服できる相手なのか否かさえ判じかねているようです。病は人間の生命を直接的に脅かすだけではありません。その広範囲／長期的な流行は社会基盤さえ破壊しかねないものであることを私たちは身をもって体験しています。そして、そのような状況は、払拭することの難しい不安を多くの人々の心にもたらしています。今回の展観では、大谷探検隊が敦煌より持ち帰った 10 世紀の『妙法蓮華経』も展示されます。ある国（詳細不明）の皇太子が痲病となった我が子の平癒を願って書写したものです。しかし、仏典の書写であるにもかかわらず、病氣平癒を道教の神々にも祈願していることが判ります。我が子を救うためにあらゆる手段を尽くそうとしていたのでしょう。現代に生きる我々ですが、この皇太子の心情は理解できます。人間は長い不安に耐えることは（おそらく）できません。ならば、その不安を取り除くために、人間、そして人間が形成する社会全体が全力を尽くさねばならないのでしょう。この展観がそのような状況を形作る一助となることを願ってやみません。最後となりますが、この展観にあたってご協力いただきました関係者各位に心より御礼申し上げます。

2021年 12月

## Hosting Special Exhibition of Omiya Library

Ryukoku University Library Dean Prof. Masahiko Takeuchi

Ryukoku University Library holds a special exhibition of 2021 with the theme of "Living with Sickness." Human beings have been suffering from sickness in history. We can say that there are so many diseases that human beings have overcome yet. We are not still sure of whether we can fight off the recent new virus. Sickness does not only threaten our life, but the pandemics of sickness may also destroy the foundation of our society that sustains our life. We are experiencing it for ourselves currently. Such a situation induces us of many indelible anxieties. In this exhibition, we display a copied Buddhist manuscript of the Lotus Sutra in 10th CE brought back by the Otani expedition from Dunhuang. The manuscript was copied by a prince of an unlettered kingdom for the sake of curing his son of contracted diarrhea. On the other hand, we discover that the prince also prayed for a cure of the illness to gods and goddesses in Taoism. He did whatever he could to save his son. We can understand his emotion even though we live in modern days. If human beings cannot persevere such anxieties for a long time, society consisted of such human beings should try out best to remove them. I wish that this special exhibition offers an opportunity to give a thought to building the spirit. Last but not the least, I would like to express my deep appreciation to those who support making this event happen.

December 2021

## 「病と生きる」とは

現在よりも医学が発達していなかった時代に、人々が病と共に生き、乗り越えてきた姿を知っていただくと共に、今日のコロナ禍を生きる上での手掛かりになることを念じて、「病と生きる」展を企画しました。

## What is “Living with Sickness”?

We plan this exhibition to understand how the people in the past when medicine was less progressive than today. With hope, we may get hints to live with the coronavirus today.

## 第一章 病と信仰……………p.6

第一章「病と信仰」では、仏教・神道・儒教・道教・キリスト教といったさまざまな宗教から、病に関連する経典や絵図などを取り上げて紹介します。

In chapter one “Sickness and Faith,” sacred texts and religious drawings of sickness found in various religious traditions such as Buddhism, Shintoism, Confucianism, Taoism, and Christianity are exhibited.

## 第二章 病と記録……………p.27

第二章「病と記録」では、奈良時代から江戸時代に至るまでの各時代の歴史書や日記から、病に関する記録を紹介する他、中国の歴史書に見られる病の記録も取り上げます。

In chapter two “Sickness and Records,” the records about sickness depicted in history books and individual diaries including some Chinese texts from Nara period through Edo period are introduced.

## 第三章 病と文学……………p.39

第三章「病と文学」では、病から生まれた物語や病に関連して詠まれた和歌、病について書かれた随筆などの文学作品を紹介します。

In chapter three “Sickness and Literature,” literary works such as waka poetries and essays sung or written on the occasion of encountering sickness are introduced.

## 第四章 病と治療……………p.49

第四章「病と治療」では、伝染病をはじめとするさまざまな病の治療について書かれた書物の他、病の治療の礎となる人体の仕組みについての書物や薬草などについて記された本草書などを取り上げ、昔の人々の病に対する研究の成果について紹介します。

In chapter four “Sickness and Treatment,” medical treatment books on various sicknesses including infectious disease and texts on the human body system and medical herbs which consist of the foundation to medical treatment are exhibited. In this chapter, we take up the knowledge and research results in the old days.

## 第一章 病と信仰

第一章「病と信仰」では、仏教・神道・儒教・道教・キリスト教といったさまざまな宗教から、病に関連する経典や絵図などを取り上げて紹介します。

In chapter one “Sickness and Faith,” sacred texts and religious drawings of sickness found in various religious traditions such as Buddhism, Shintoism, Confucianism, Taoism, and Christianity are exhibited.



1  
**釈迦御一代記図会**

6巻 6冊  
 好花堂野亭考編  
 弘化2年(1845)  
 縦25.6×横17.8cm  
 [請求記号 913.65-35W-6]

『釈迦御一代記図会』は、釈迦如来の生涯を55の説話で物語った図会ものの仏書である。

一般的な釈迦如来伝は、悟りを開く降魔成道(ごうまじょうどう)までの半生に重点が置かれているが、ここでは降魔成道以降の半生に重点が置かれて描かれている。

王子であった釈迦が老人、病人、死者を見て、出家の道を求める「四門出遊(しもんしゅつゆう)」の話がよく知られているが、この図会では浄居仏(じょうごぶつ)が老人や病人、比丘に姿を変えて釈迦に無常を説いている。



瑛之始白鶴一雙繞墳鳴喚聲甚哀婉葬後三日歿然永逝下敕豎禪墓左詔王筠為文釋曇鸞或為齋未詳其氏廌門人也家近五臺山神迹靈怪逸于民聽時未志學便往尋焉備覲遺蹤心術歡悅便即出家內外經籍具陶文理而於四論佛性彌所窮研讀大集經恨其詞義深密難以開悟因而注解文言過平便感氣疾權停筆功周行醫療行至汾州秦陵故墟入城東門上望青霄忽見天門洞開六欲階位上下重複歷然齊觀由斯疾愈欲繼前作顧而言曰命惟危脆不定其常本草諸經具明正

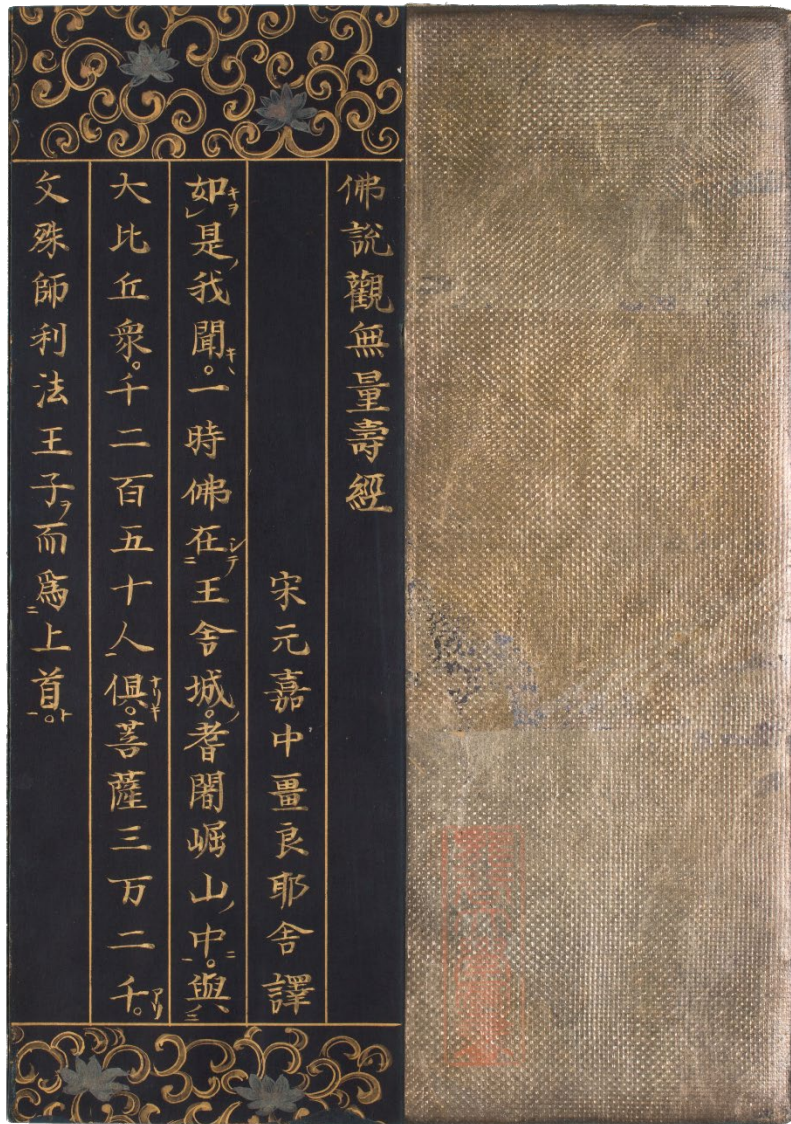
治長年神仙往往間出心願所積修習斯法果尅既已方崇佛教不亦善乎承江南陶隱居者方術所歸廣博弘贍海內宗重遂往從之既達梁朝時大通中也乃通名云北國虜僧曇鸞故來奉謁時所司疑為細作推勘無有異詞以事奏聞帝曰斯非覘國者可引入重雲殿仍從千迷道帝先於殿隅却坐繩牀衣以袈裟覆以納帽鸞至殿前顧空無承對者見有施張高座上安几拂正在殿中俯無餘座徑往昇之豎佛性義三命帝曰大檀越佛性義深略已標敘有疑賜問帝却納帽便以數闌往復因曰今日向晚明須

## 2 續高僧傳

(唐)道宣撰  
慶安4年(1651)  
丁子屋西村九郎右衛門刊  
縦27.0×横19.2cm  
[請求記号 296.4-164W-16]

『續高僧傳』は、中国唐の律宗の僧・道宣(596～667)が撰した、梁代から唐代初めに至るまでの高僧の伝記である。

中国浄土教の祖で、浄土真宗における七高僧(しちこうそう)の一人とされる曇鸞(どんらん。476～542)についても伝記がある。曇鸞は『大集経』の注釈をしようとして病気になる、不老長寿の術を得るべく茅山の陶弘景(とうこうけい。456～536)について学んだが、洛陽で菩提流支(ぼたいりし)に会い『観無量寿経』を授けられ、浄土教に帰依したとある。



### 3

#### 仏説観無量寿経

1巻 1帖

(南朝宋)曇良耶舍訳

[江戸時代]写本

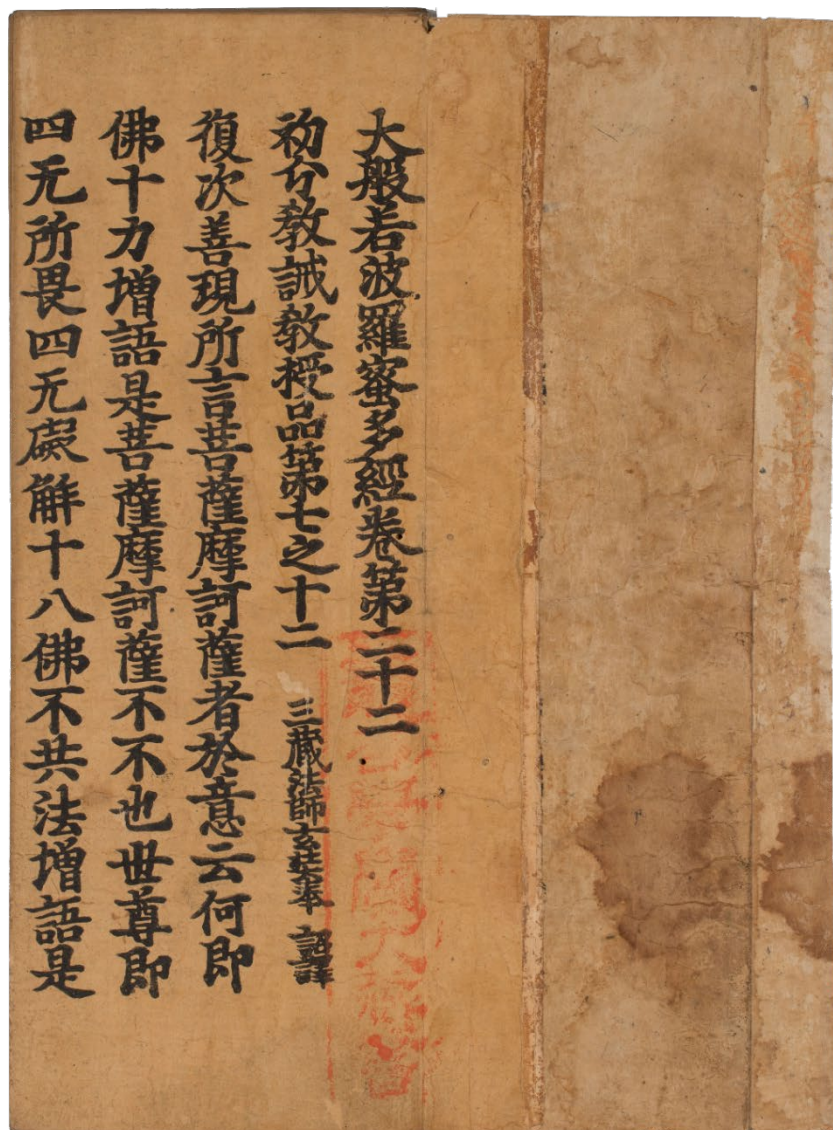
紺地金泥

縦 27.8×横 875.7cm

[請求記号 021-601-1]

『仏説観無量寿経』は、中国南朝・宋代の曇良耶舍(きょうりょうやしや、382～443)によって訳された大乘仏教の経典である。内容は、マガダ国王妃・韋提希(いたいけ)夫人の願いにより、釈迦が極楽世界や阿弥陀仏などを観想する13の観法を説いたものである。

この経典は、中国浄土経の祖である曇鸞に影響を与えたばかりでなく、日本では浄土教の根本聖典の一つとされており、浄土宗開祖・法然(1133～1212)は『仏説無量寿経』、『仏説阿弥陀経』と合わせて浄土三部経と称した。



4

大般若波羅蜜多經(大般若經)

第22卷 第102卷 2帖

(唐)玄奘奉詔訳

[南北朝期]刊

縦 25.8×横 1021.8 cm

縦 25.8×横 870.6 cm

[請求記号 021-88-2]

『大般若波羅蜜多經』(たいはんにはんにゃはらみったきょう)は、中国唐の僧・玄奘三蔵(げんじょうさんぞう。602～664)が、インドなどから大乘仏教の教義が書かれている様々な般若經典を持ち帰り、4年の歳月を費やし漢訳した經典である。

日本では、奈良時代の僧・道慈(生卒年不詳)が、『大般若經』の転読を諸国の年中行事に加えることを朝廷に願い出て許されたことにより広まった。現在でも、和歌山県の紀三井寺など各地で、無病息災を願って転読会(てんどくえ)が行われている。

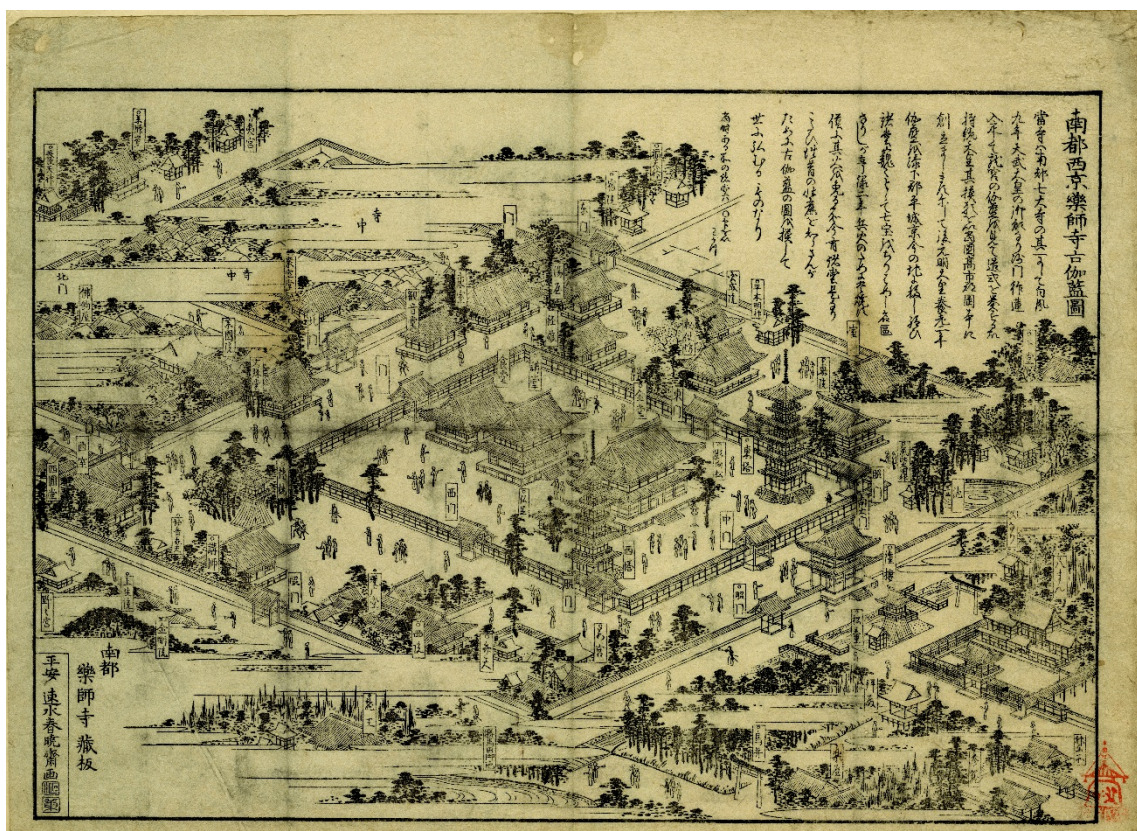


5

藥師瑠璃光如來本願功德經

1卷 1帖  
 (唐)玄奘訳  
 嘉永5年(1852)  
 叡山根本中堂刊  
 縦27.5×横67.41cm  
 [請求記号 022-588-1]

『藥師瑠璃光如來本願功德經』(藥師經)は、大乘仏教の藥師如來に関する經典である。藥師如來は東方淨瑠璃世界の教主で、菩薩の時に12の大願を發し、人々の病患を救い悟りに導くことを誓い仏と成ったと説かれる。現世での利益(りやく)を与える面が強いため、中国・日本では古來信仰が盛んであった。



6  
南都西京薬師寺古伽藍図

1 紙  
速水春暁齋画  
[江戸末期]刊  
木版墨摺 薬師寺蔵版  
縦 35.0×横 49.0 cm  
[請求記号 024.301-5-7/121]

『南都西京薬師寺古伽藍図』は、江戸時代に、往昔の薬師寺の伽藍の壮麗さを伝えるために摺られたものである。

薬師寺は、現在の奈良市六條町にある法相宗の大本山である。天武天皇 9 年 (680)、天武天皇の皇后(後の持統天皇)の病氣平癒を祈って造立され、文武天皇 2 年 (698)に完成した。当初飛鳥に建てられたが、藤原京に移され、平城京遷都に伴い養老 2 年(718)現在地に移った。およそ 1300 年経った今日でも、無病息災を願う人々に信仰されている。

見有受持是經典人應當如是生恭敬心說  
是藥王菩薩本事品時八万四千菩薩得解  
一切衆生語言陀羅尼多寶如來於寶塔中  
諸宿王華菩薩言善哉善哉宿王華汝成  
就不可思議功德乃能問釋迦牟尼佛如此  
之專利益无量一切衆生

妙法蓮華經卷第六

辛未年正月七日弟子皇太子 脛 為男弘忽染痢疾非  
常困重遂發願寫此妙法蓮華經上蓋一切諸佛諸  
大菩薩摩訶薩及大山府君 平等大王 五道大神 天曹地府  
司命司錄 土府水官 行騎鬼王 疫使 知文籍官院長 祠門官  
專使可囑官并一切幽冥真言典等伏願慈悲救護  
願弘疾苦早得痊平增益壽命所造前件功德唯  
願過去未來見在數生已來所有冤家債主百  
財員命者各願領受功德速得生天

7

妙法蓮華經

卷第6

10世紀 写本 敦煌出土

縦 26.0×横 1041.8 cm

[大谷文書 512]

『妙法蓮華經』は、西本願寺第22代宗主大谷光瑞(1876~1948)が派遣した大谷探検隊によって、敦煌からもたらされた資料の一つである。奥書から、皇太子が痢病(赤痢の類)を患ってしまった息子の病氣平癒を願って書写したことがわかるが、どこの国の皇太子であるかは、不明である。

興味深い点は、病氣平癒の祈願をなしたのが諸仏・諸菩薩の他に、大山府君・平等大王・五道大神などの道教の尊格に及んでいることである。



## 8

### 融通念仏縁起絵

2巻 2帖

天保15年(1844)跋

刊本

上巻縦36.2×横1984.8cm

下巻縦36.2×横2181.2cm

[請求記号 022-60-2]

『融通念仏縁起絵』(ゆうずうねんぶつえんぎえ)は、平安時代後期に融通念仏を起こした良忍(1073～1132)の事績及び念仏の功德について説いた説話が書かれた絵巻物である。本資料は、絵巻物ではなく、折本の形態になっている。

疫病を表す鬼達が念仏の道場の入り口まで押しかけてくるが、男が鬼達に向かって念仏の仏事に参加している人々の名前を記した巻物を示すことで、鬼達は念仏の功德に感じ入り、参加している人々に悪いことをしないという約束を巻物に書いて退散したという話が、念仏の功德の一つとして描かれている。



9

### 庚申青面金剛像

1紙

[江戸時代]刊

木版色摺

縦40.0×横18.8cm

[請求記号 024.301-18-21/30]

『庚申青面金剛像』は、仏法守護の主神である帝釈天(たいしゃくてん)の使者とされる青面金剛を一枚の色摺りにしたものである。青面金剛は、後に道家の思想が加わり、庚申(かのえさる)の日に、人の体に住む三尸(さんし)が、体を抜け出してその人の罪悪を天帝に告げることを防ぐために徹夜する庚申待(こうしんまち)の本尊とされた。

青面金剛の身体は青色で六臂に造り、眼は三眼、頭髪は火のように逆立ち、忿怒(ぶんぬ)相をしている。病魔・病鬼を除くとされる。





10  
角大師像

1紙  
[江戸時代初期刊  
木版墨摺  
伊勢国東寺蔵版  
縦 43.0×横 24.0 cm  
[請求記号 024.301-33-1]

『角大師像』(つのだいしろう)は、比叡山延暦寺第18代座主であり、元三(かんざん)大師の通称で親しまれている慈恵大師良源(912～985)が祈禱する姿を描いたとされている。両角を有する鬼形相の故に角大師と呼ばれている。

角大師の姿を札として配ったところ、流行していた疫病が治まったという言い伝えがある。そのため病除け、病治癒の効能として、今日まで人々に信仰されてきた。現在でも国東寺(くづかじ)では、角大師の札を信者に授与している。



11

当麻寺中将法如廿九歳之御影

1紙

[江戸時代]刊

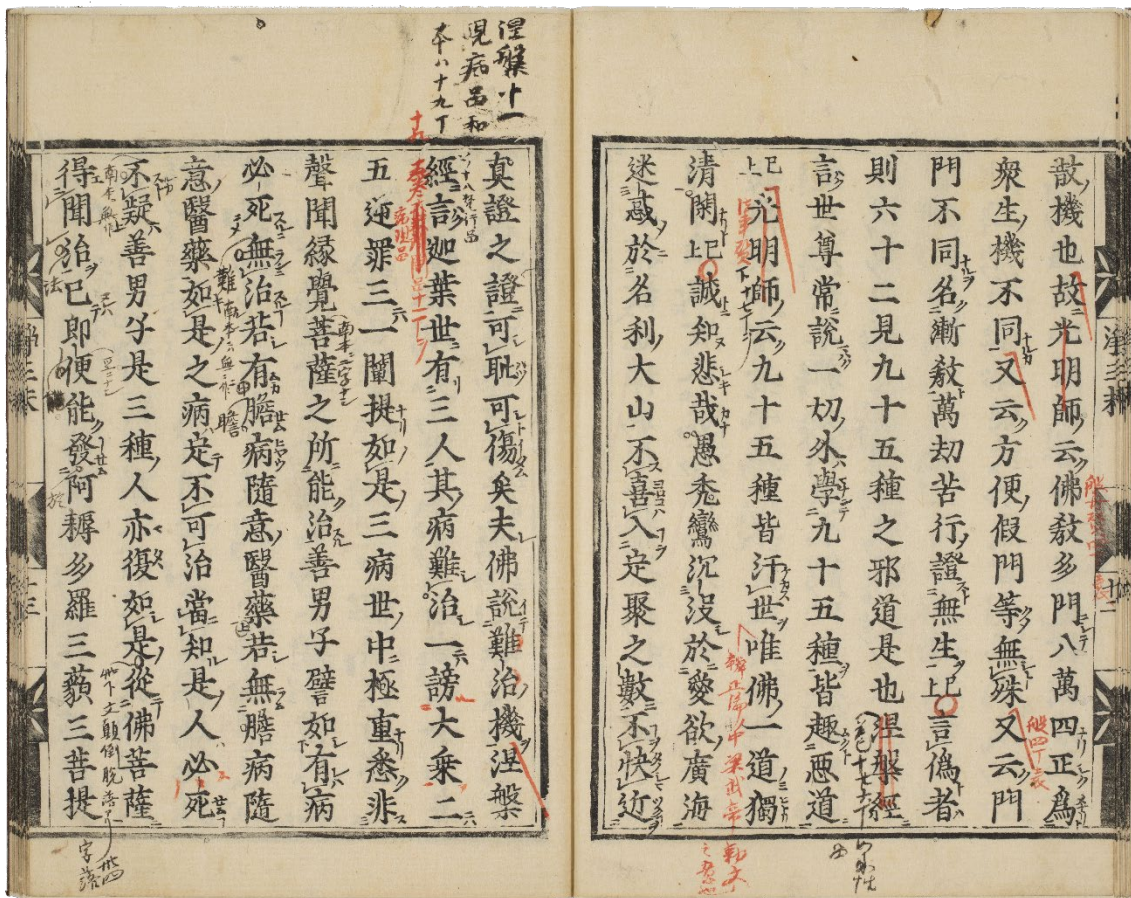
木版墨摺

縦 54.0×横 32.0 cm

[請求記号 024.301-30-12/16]

『当麻寺中将法如廿九歳之御影』(たいまでらちゅうじょうほうにょにじゅうきゅうさいのごえい)は、天平時代に当麻寺に在って発願し、観無量寿経により、蓮糸を以て当麻曼荼羅を織ったという伝承で知られている中将姫の姿を一枚摺りにしたものである。中将姫は、29歳で入滅し、その際、阿弥陀如来と二十五菩薩が来迎し、生きたまま西方浄土に向かったとされる。

中将姫が生前婦人病に悩まされ、観音菩薩に祈願したところたちまち平癒したという伝承から、当麻寺の十一面観音像は「導き観音」の名で婦人病・安産の守りとして信仰されている。



12

顯淨土真實教行証文類(教行信証)

8冊 6卷

親鸞集

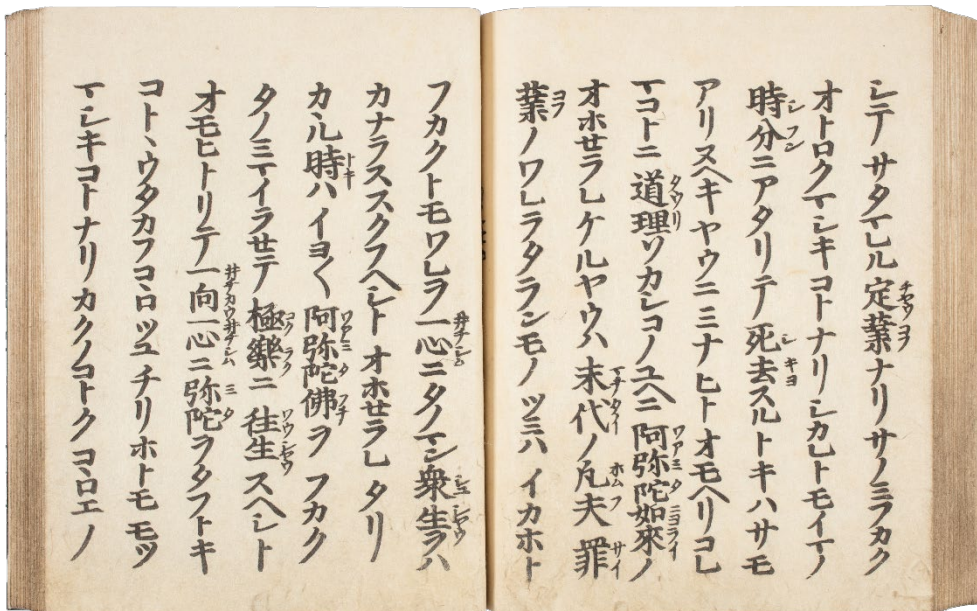
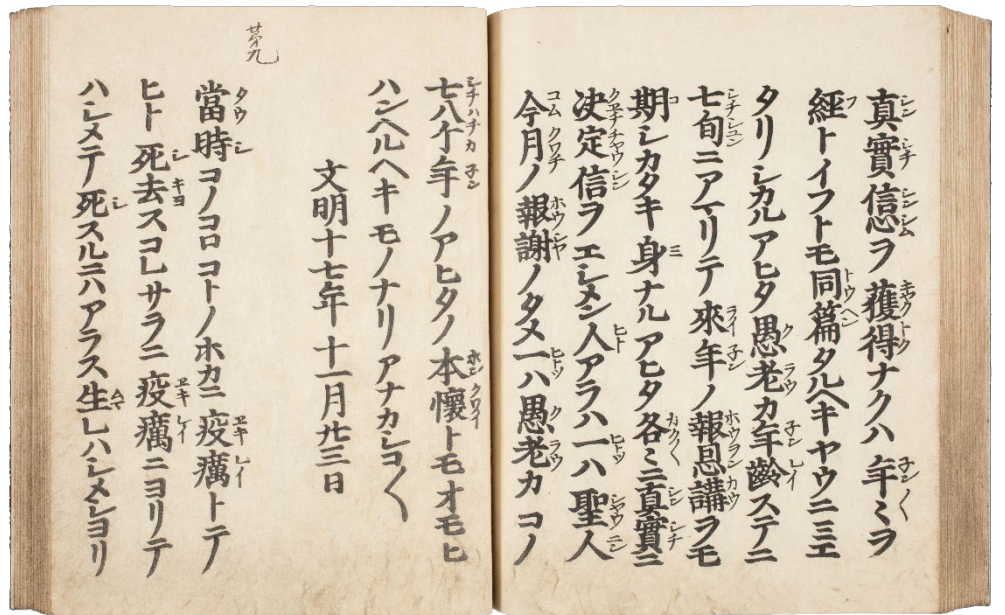
刊本

縦 27.6×横 18.2 cm

[請求記号 021-255-8]

『顯淨土真實教行証文類』は、浄土真宗の宗祖親鸞(1173～1262)の著書であり、他力本願・極楽往生を説いた浄土真宗の根本聖典である。

親鸞は、教えを説くために、多くの經典や論書を引用しているが、「信巻」には、『涅槃經』を引用して難化の三機・難治の三病を取り出して、人の煩惱である貪・瞋・痴を救いがたい病としている。この他にも、医学医術、医薬、病氣、病状などの数々の言葉が使用されており、親鸞の思想を理解する上で、仏教經典中の医学、医薬、医療などの事柄との関連を無視できないとの指摘がある。



13

五帖御文

5帖

蓮如述

法如証判

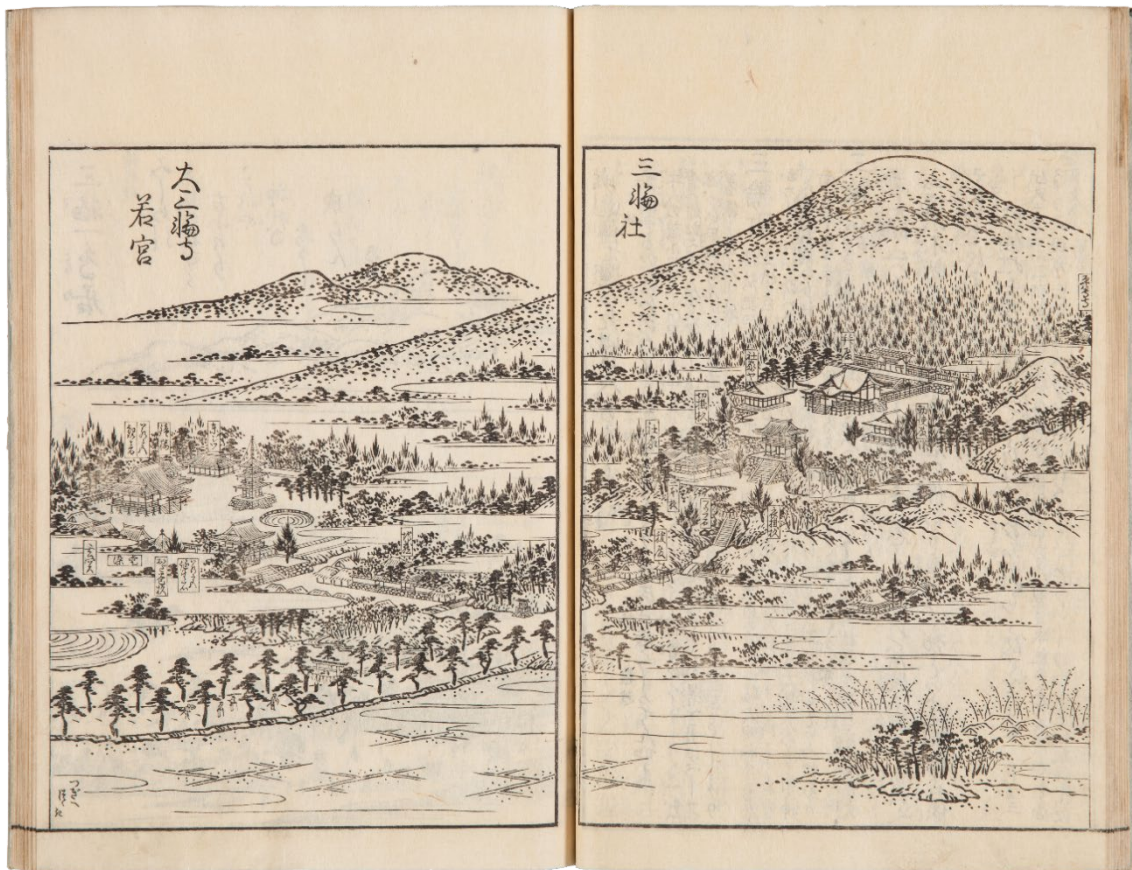
江戸時代後期刊

縦 26.0 × 横 21.8 cm

[請求記号 021-539-5]

『五帖御文』は、本願寺第8代宗主蓮如(れんによ。1415～1499)が、布教の為、全国の門徒へ消息として送った仮名書きの法語について、蓮如の孫である圓如(えんによ)が80通を選び、編集したものである。

この中でも第4帖目第9通は、「疫癘の御文(えきれいのおふみ)」として知られている。「疫癘の御文」が書かれた延徳4年(1492)は、疫病が流行して多くの人々が亡くなった年であった。疫病を恐れ迷う人々に対して蓮如は、「人は病が原因で死ぬのではなく、死は生まれた時から定められているのだから、病を恐れて惑わされないように」と説いている。



14

## 大和名所図会

6巻 7冊

秋里籬寫著

竹原春朝齋画

寛政3年(1791)

浪華高橋平助等刊

第1冊

縦 25.2 × 横 17.7 cm

第2冊至第7冊

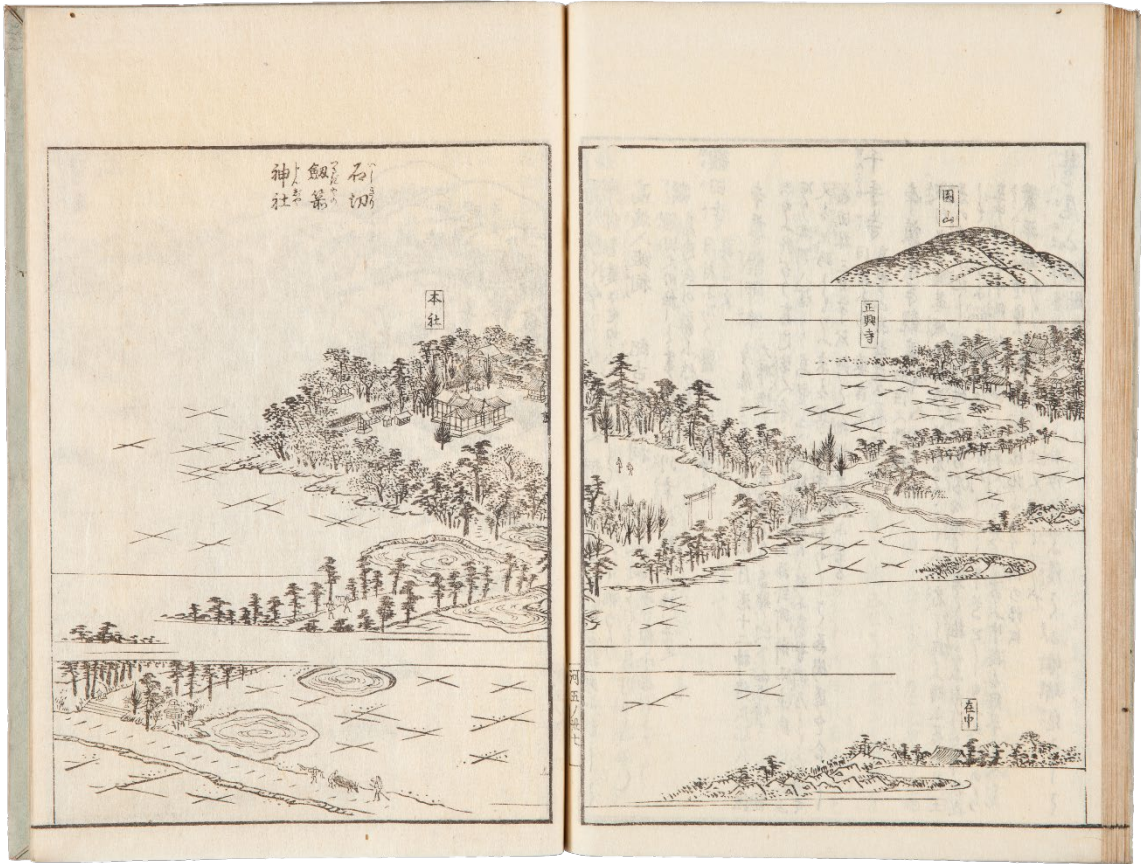
縦 26.8 × 横 18.3 cm

[請求記号 491.47-7W-7]

写字台文庫

『大和名所図会』は、読本作者・秋里籬寫(あきさと)りとう。生没年未詳が大和国(やまと)のくに。現在の奈良県)の寺社などの名所について記し、大阪の浮世絵師・竹原春朝齋(たけはらしゅんちようさい)が挿絵を描いた名所案内である。

第4巻に収められている大神神社(おおみわじんじゃ)は、三輪山を神体山とする神社で、主祭神は大物主大神(おおものぬし)のおおかみである。稲作豊穰、醸造、疫病除けなどにご利益があるとされ、古くから信仰されているが、特に境内の摂社である狭井神社(さいじんじゃ)の御神水は諸病に効くとされている。

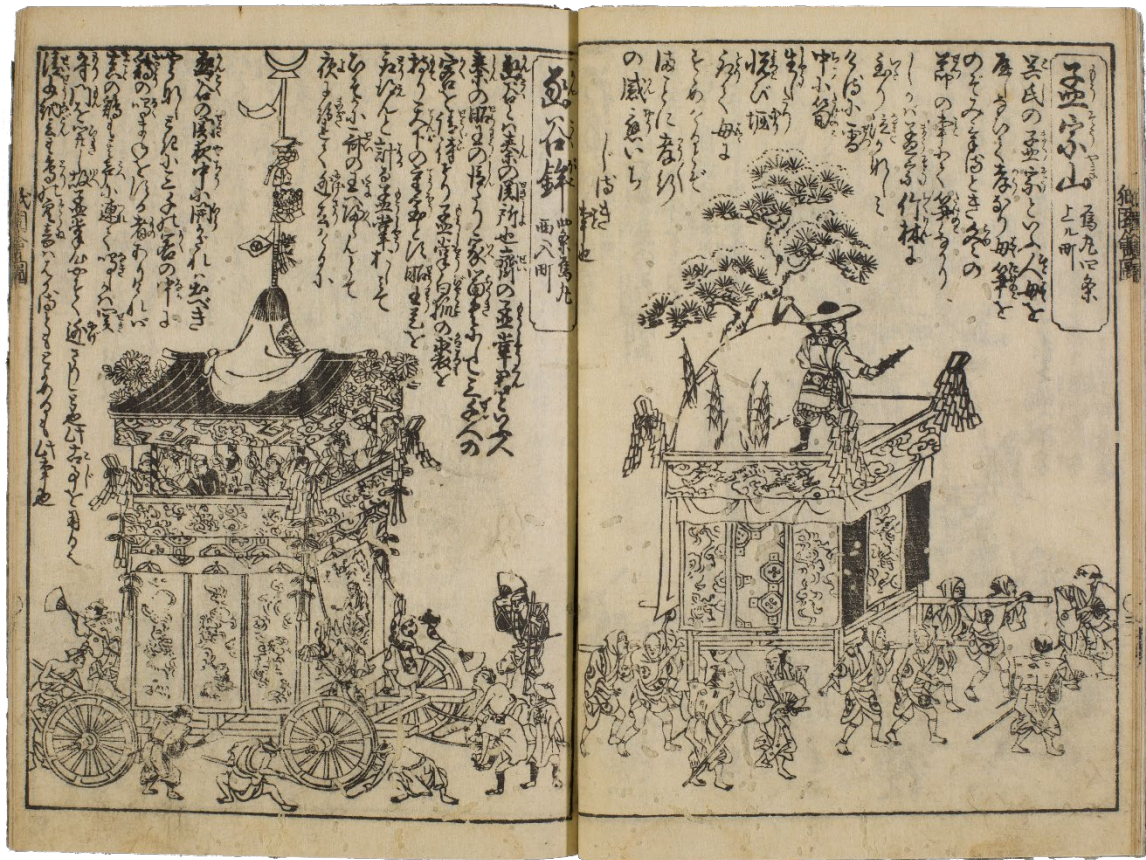


## 15 河内名所図会

6巻 6冊  
 秋里籬寫著  
 丹羽桃溪画  
 享和元年(1801)  
 浪華森本太助等刊  
 縦 26.3×横 18.5 cm  
 [請求記号 491.43-19W-6]  
 写字台文庫

『河内名所図会』は、前出の『大和名所図会』の著者秋里籬寫が著した現在の大阪府東部である河内国(かわちのくに)の寺社などの名所について記した名所案内である。挿絵を担当した丹羽桃溪(にわたうけい)は、大阪の浮世絵師であり、狂歌も多く詠んだ人物である。

第5巻に収められている石切劔箭神社(いしきりつるぎやじんじゃ)は、古代天皇の側近として使えた物部氏の祖神である饒速日尊(にぎはやひのみこと)を御祭神とする神社である。「でんぼ(腫物)の神様」として親しまれ、病氣平癒を祈願するために参拝する人が多い。



16

祇園会細記 (又名山鉾由来記)

1冊

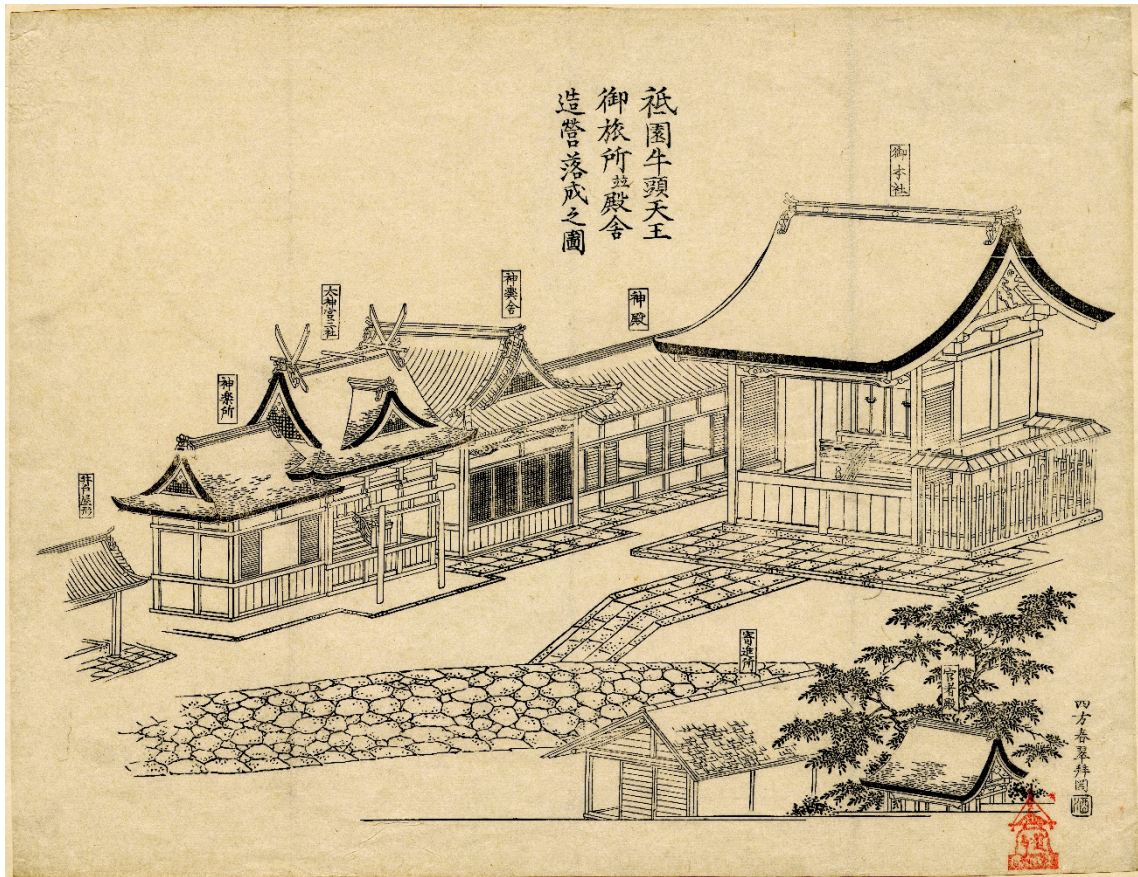
刊本

縦 220×横 156 cm

[請求記号 024.3-898W-1]

『祇園会細記』は、祇園祭の由来や各山鉾について詳細を記したものである。本資料は、序文などの冒頭部分を欠いている。

八坂神社の祭礼であり、京都の夏の行事として知られる祇園祭は、疫神や死者の怨霊などを鎮めなだめるために行う祭である御霊会(ごりょうえ)を起源とする。御霊会は、貞観5年(863)に初めて東寺の神泉苑で執り行われたが、貞観11年(869)の御霊会が祇園祭の始まりとされている。



17

祇園牛頭天王御旅所並二殿舎造営落成之圖

1 紙

[江戸末期刊]

木版墨摺

縦 38.0 × 横 49.0 cm

[請求記号 024.301-22-1/50]

『祇園牛頭天王御旅所並二殿舎造営落成之図』(ぎおんごずてんのうおたびよならびにでんしゃぞうえいらくせいず)は、牛頭天王御旅所などが落成したことを記念して摺られたものと思われる。御旅所とは、祇園祭の行事の中で、山鉾巡行の後、八坂神社の本殿に祀られている牛頭天王を迎え入れる為の場所である。

日本における神仏習合の神である牛頭天王は、平安時代から病を流行らせる行疫神として崇信される八坂神社の祭神である。祇園祭は、その牛頭天王を祀ることにより、疫病や死者の怨霊を鎮める祭礼である。





18  
浮世絵二十四孝図版集（郊子）

1紙

[江戸末期]刊

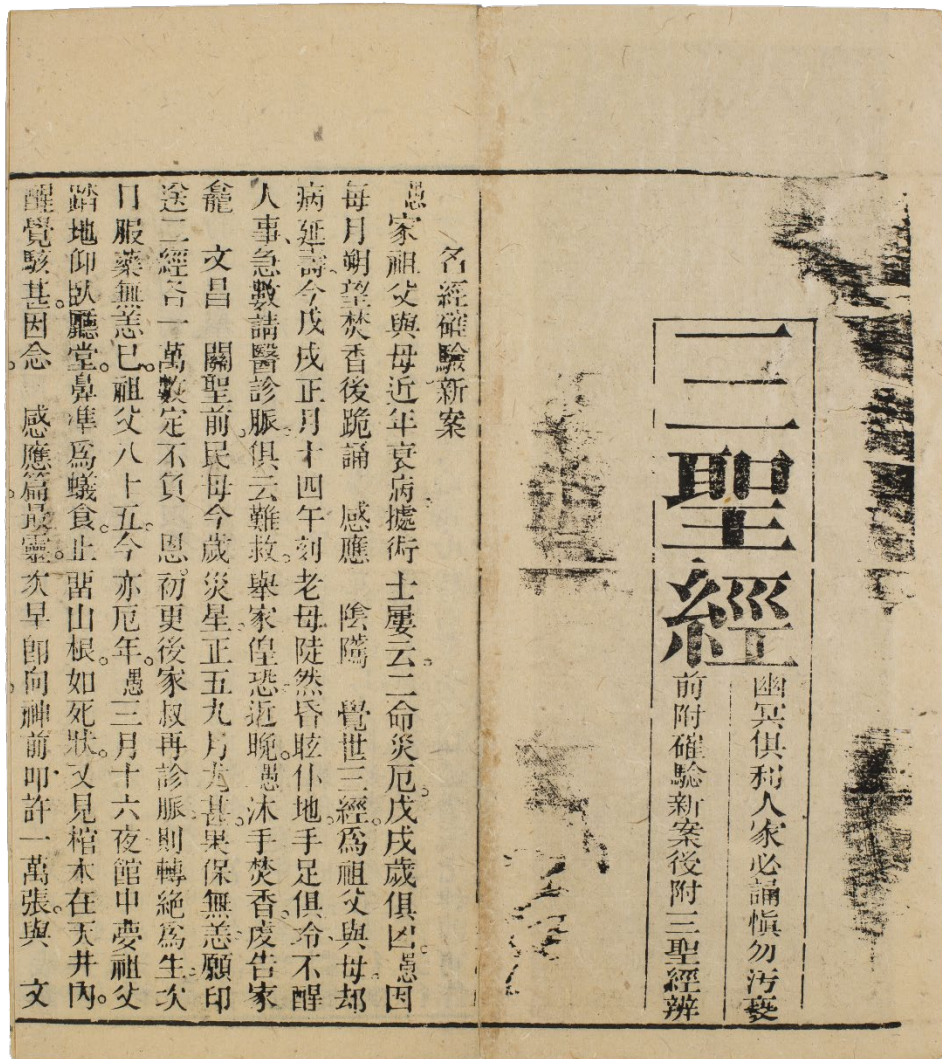
木版色摺

縦 25.0 × 横 37.0 cm

[請求記号 024.301-44-2/5]

『浮世絵二十四孝図版集』は、中国で儒教の教えにより、古来の親孝行で有名な24人の人物である二十四孝を浮世絵にしたものである。二十四孝の話は、教訓書として日本にも伝えられ大きな影響を与えた。

二十四孝の中には、病気の親に孝行を尽くす話が幾つかある。ここに描かれているのは、眼病を患った両親のために鹿の乳を得ようとして鹿の皮を纏(まと)ったところ、獵師に間違われて危うく射られそうになったが、親孝行の話聞いた獵師から射られずに難を逃れた郊子(たんし)の逸話である。



19

三聖經

太上感應篇 1 卷  
 文昌帝君陰騭文 1 卷  
 閔聖帝君覺世真經 1 卷  
 1 帖 [清末民国初]刊  
 尊徳堂板道教叢典之一  
 縦 30.3×横 406.6 cm  
 [請求記号 326-37W-48/85]

『尊徳堂板道教叢典』は、清朝末期から民国初期にかけて刊行された経巻の叢典である。全74種の経巻には、道教系、仏教系の経巻の他、民間宗教の経巻も含まれており、19世紀中国の地域社会における民間宗教を探る資料として貴重である。

経巻の一つである『三聖經』は、『太上感應篇』、『文昌帝君陰騭文』、『閔聖帝君覺世真經』から構成されている。刊行の経緯は、寒泰来(けんたいらい)の母と祖父が病で倒れたが、この経を誦して救われたことなどによるとされる。

父不以善物賜求之者乎。爾欲人施諸己，亦必如是施諸人。此律法先知也。○當進窄門，引而之死，其門也闊，其路也寬，入之者多，引而之生，其門也窄，其路也狹，得之者少，謹防僞師，其就爾，外如羔羊，內實豺狼，是可因其果識之，荆棘中，豈摘葡萄乎？荜藜內，豈采無花果乎？善樹結善果，惡樹結惡果，善樹不結惡果，惡樹不結善果，凡樹不結善果者，即斫之委火，是故因其果識之矣。○凡稱我曰主也主也者，未必盡入天國，惟遵我天父旨者入焉。當日多人將語我云，主也主也，我非托爾名傳教，托爾名逐鬼，托爾名廣行異能乎？我將明告之曰，作不善者，吾未嘗識爾，其離我去矣，聞吾言而行之者，譬彼智人，建屋磐上，雨降潦行，風吹撞屋，而不傾覆，因其磐上，聞吾言而不行者，譬彼愚人，建屋沙上，雨降潦行，風吹撞屋，遂以傾覆，而傾覆者大也。耶蘇言竟，眾奇其訓，以其教人，若操權者然，不同士子也。

○入迦百農時，有百夫長就耶蘇求曰，主，我僕癱瘋，偃臥在室，德為眾證。○我往醫之，對曰，主，隨我舍，不敢當，第發一言，僕必愈。蓋我權屬人，兵權屬我，命去則去，命來則來，令僕行是，即行是。耶蘇聞而奇之，謂從者曰，吾誠告爾，以色列中，未見如是之信也。吾語汝，自東自西，眾其將至，與亞伯拉罕，以撒，雅各，席坐於天國，而國之赤子，則逐於絕域幽暗，在彼有哀哭切齒者矣。耶蘇謂百夫長曰，往哉，以爾之信，成矣。即時僕愈。○彼得有妻之母，偃臥病牀，耶蘇至，欲得家，見之，按其手，瘡即退，婦起而供事焉。既暮，有攜鬼來就者，俱以一言逐之，負病者醫之，應先知以賽亞言云，其任我恙，肩我病。○耶蘇見羣眾，已命門徒偕往彼岸。有士子就曰，先生不論何之，我欲從爾。耶蘇曰，狐狸有穴，飛鳥有巢，惟人之子，無枕首之所也。又一門徒曰，主，容我歸葬父。耶蘇曰，從我，任夫死人葬其死人，耶蘇登舟，門徒從之。海盪甚，浪蔽舟，耶蘇寢，門徒就而醒之曰，主，救我，亡矣。曰，小信者乎，何懼耶？即起，斥風與海，遂大平息。眾奇曰，彼何人斯，風與海亦順之也。○願濟至革草沙地，遇患鬼二人，自墓出，甚猛，無敢過彼路者。

20 新約全書

1卷1冊

清咸豐9年(1859)

上海墨海書館鉛印

縱21.0×橫14.4 cm

[請求記号 024.3-2152W-1]

『新約全書』は、『新約聖書』の一書名であり、内容は27の書から成り、キリストの生涯と死と復活、初代教会の発展についての信仰証言となっている。本書は『新約聖書』を漢訳したものである。19世紀より、プロテスタント諸教会は海外宣教に力を入れ、聖書を中国の人々にも理解できるよう漢訳を試みた。

新約聖書には、イエス・キリストの奇跡の1つとして、病の人々を癒したことがたびたび記されている。例えば、マタイによる福音書には、当時は不治の病であったハンセン病に罹った人を、触れただけで癒したとあり、神の子としての奇跡を称えている。

## 第二章 病と記録

第二章「病と記録」では、奈良時代から江戸時代に至るまでの各時代の歴史書や日記から、病に関する記録を紹介する他、中国の歴史書に見られる病の記録も取り上げます。

In chapter two “Sickness and Records,” the records about sickness depicted in history books and individual diaries including some Chinese texts from Nara period through Edo period are introduced.

日賣命柱二又娶尾張連之祖意富阿麻比賣生  
 御子大入杵命次八坂之入日子命次沼名木  
 之入日賣命次十市之入日賣命柱四又娶大毗  
 古命之女御真津比賣命生御子伊玖米入日  
 子伊沙知命伊久米伊沙知次伊耶能真若命伊  
 至能次國丹比賣命次千々都久和此三字比  
 賣命次伊賀比賣命次倭日子命此天皇之  
 御子等并十二柱男王七女五也故伊久米伊理毗

古伊佐知命者治天下也次豐木入日子命者  
 上在野下毛野君等之祖也妹豐鉏比賣命神祭伊勢大次  
 大入杵命者能登臣次倭日子命此王之時始而  
 此天皇之御世疫病多起人民死為盡余天皇  
 愁歎而坐神牀之夜大物主大神顯於御夢曰  
 是者我之御心故以意富多多近古而令祭我  
 御前者神氣不起國安乎是以驛使班于四方  
 求謂意富多多近古人之時於河内之美努村

21 古事記

3卷3冊

太安万侶奉勅撰

寛永21年(1644)

風月宗智刊

縦27.1×横19.1cm

[請求記号 410.1-73W-3]

『古事記』は、和銅5年(712)に太安万侶(おおのやすまろ)が編纂した日本最古とされる歴史書である。天地開闢(てんちかいびやく)の神話時代から推古天皇の時代までが記録されている。

御真木入日子印惠命(みまきいりひこい)にえのみこと。崇神天皇の紀に、「此天皇之御世、疫病多起、人民死為尽」と崇神天皇の治世に疫病が多発し多くの人々が死んだことが記されており、これが国史に疫病が記録された最初の記事とされている。

衿起塔於大野丘北大會設齋即以達等取獲  
舍利藏塔柱頭辛亥蘇我大臣患疾問於卜者  
卜者對言崇於父時取祭佛神之心也大臣即  
遣子弟奏其占狀詔曰宜依卜者之言祭祠父  
神大臣奉詔禮拜石像乞延壽命是時國行疫  
疾民死者衆三月丁巳朔物部弓削守屋大連  
與中臣勝海大夫奏曰何故不肯用臣言自考  
天皇及於陛下疫疾流行國民可絕豈非專由

獲我臣之興行佛法歟詔曰灼然宜斷佛法丙  
戌物部弓削守屋大連自詣於寺踞坐胡床斫  
倒其塔縱火燼之并燒佛像與佛殿旣而取取  
燒餘佛像令棄難波掘江是日無雲風雨大連  
被雨衣訶貴馬子宿衿與從行法侶令生殿辱  
之心乃遣佐伯造御室間更名於喚馬子宿衿取  
供善信等尼由是馬子宿衿不敢違命惻愴啼  
泣喚出尼等付於御室有司便奪尼等三衣禁

## 22

### 日本書紀

30卷(欠卷第23至30)

10冊

舍人親王等奉勅撰

刊本

縦26.4×横18.9cm

[請求記号410.1-26W-10]

写字台文庫

『日本書紀』は、養老4年(720)に成立した日本初の正史とされる歴史書である。神話の時代から持統天皇の時代までの記録が収められ、漢文、編年体で記されている。本書は全30巻のうち巻第23～30を欠く。

敏達天皇(びだつてんのう)14年(585)3月、物部氏守屋らが、2月に病で多くの人が亡くなったのは蘇我氏が仏教を信仰したためではないかと奏上し、仏像や仏殿が焼かれ、仏塔が倒されるなどの弾圧が行われた。しかし、却って天皇や守屋が病気になる、病で亡くなる人も増えたため、仏像を焼いた罪の報いではないかと言われるようになったとある。崇仏廢仏論争に病が利用されたことが分かる。

皇即道子  
金澤公通

穀三石九十以上穀二石八十以上穀一石孝  
子順孫義夫節婦表其門閭終身勿事鰥寡悍  
獨薦疾之徒不能自存者所在官司量加賑恤  
○庚子更置鑄錢司○壬寅 天皇臨朝召諸  
國朝集使等中納言多治比真入縣守宜 勅  
曰朕選卿等任為國司奉遵 條章僅有一兩人  
而或人以虛事求聲譽或人背公家向私業因  
此比年國內弊損百姓困乏理不合於自今以

丙子  
殿金澤本注本  
作轉紀等類  
原圖大同  
置 戊申年五銘

後勤恪奉法者應賞之懈怠無狀者貶黜之且  
知斯意各自努力是歲年頗不稔自夏至冬天  
下患 豌豆瘡俗曰天死者多  
八年春正月丁酉 天皇宴群臣於南殿賜祿  
有差○戊申授正六位上坂上忌寸犬養外從  
五位下○辛丑 天皇臨朝授從四位上紀朝  
臣男人正四位下從五位上石川朝臣夫子正  
五位下石上朝臣勝雄並正五位上從五位下

23

続日本紀

40 卷 20 冊

藤原繼繩・菅野真道等撰

明暦 3 年(1657)跋

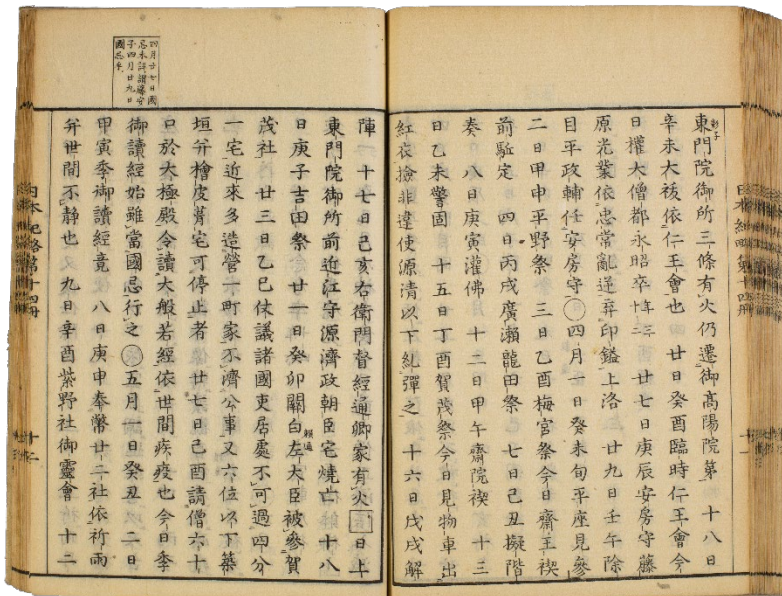
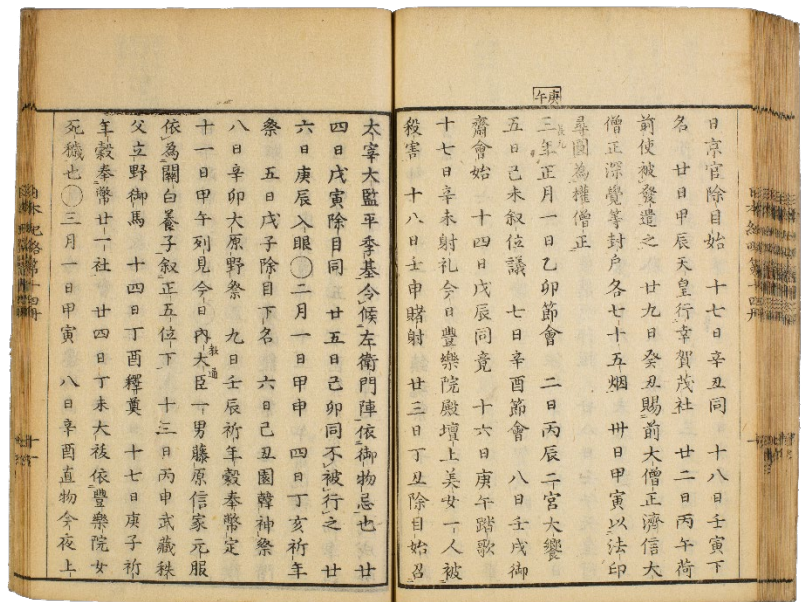
京都丁子屋源次郎等刊

縦 25.5× 横 18.5 cm

[請求記号 410.25-1W-20]

『続日本紀』は、平安時代初期に編纂された勅撰史書である。文武天皇元年(697)から桓武天皇の延暦 10 年(791)までを収める。漢文、編年体で記されている。

天平 7 年(735)に、日本で初めて死亡率の高い伝染病である天然痘が流行し、多くの人々が犠牲になったことが記録されている。流行は続き、同 9 年には政治を担う公卿(藤原氏四兄弟)も相継いで亡くなったとあり、天然痘の流行が政治や経済にも大きな打撃を与えたことがうかがえる。



## 24 日本紀略

5冊  
 (醍醐天皇至後一条天皇)  
 山崎知雄校  
 万延元年(1860)  
 江戸山城屋佐兵衛等刊  
 縦 25.7×横 17.9 cm  
 [請求記号 410.3-5W-5]

『日本紀略』は、平安時代末期に編纂された歴史書である。編者は不詳。『日本書記』をはじめとする「六国史」(りっこく)の抄録と、六国史以降の後一条天皇の時代(長元9年(1036))までを収める。

後一条天皇の長元3年(1030)に、疫病平癒のため4月に大極殿で『大般若経』の転読が行われ、5月に諸国に『観音経』の転読などを命じ、6月には大極殿に於いて臨時の仁王会が執り行われたことが記されている。政策として、宗教儀式を相継いで執り行うことで疫病を何とか抑えようとする姿が見える。



天曆九年閏九月廿一日左大臣着左近陳示告諸  
 卿云恭議一人先日被仰云今第秋間疫病流行  
 人民病苦兼月殘菊宴有無之由諸卿可定申折去  
 延長元年依疫病停九月九日第更喜廿年依諸國  
 損不堪并疫病等事停止同篇同九年又依疫病  
 樹木秋苑等之事停止云云外記所易申如此者今  
 日依諸卿數小不能一定奏聞但大臣官奏之次奉  
 勅召女外記稱叙傳說仰云兼月五日殘菊宴依疫  
 疫事宜隨停止今案十月五日  
 受部記天曆四年十月八日第九日第

兼月五日可開食藥而實其朝准玉燭  
 日可宜由略定五日由八日可程  
 兼月五日可開食藥而實其朝准玉燭  
 日可宜由略定五日由八日可程  
 兼月五日可開食藥而實其朝准玉燭  
 日可宜由略定五日由八日可程

原伊尹宜手進敷殿下文臺管還東階加敷殿下管  
 徑殿東廂入西屋東白簷一間置大臣座西南初伊  
 尹私問置文臺管儀昂以受長例示論之申將云內  
 守大臣仰可置臺盤上由管云是叙恒日置恒記管  
 之例也譜詩之時就手座何更安盤上盤盤大臣所  
 仰心有所據恒亮色可進止仍伊尹捧管跪大臣里  
 後候亮色澤也處後置之又內宴例汝將加弓執管

25

政事要略

130 卷 26 冊  
 惟宗允亮著  
 安政 2 年(1855)  
 藤原(日野西)延榮写  
 縦 26.3× 横 18.5 cm  
 [請求記号 528.1-34W-26]

『政事要略』は、平安時代の法制書であり、律令の専門家である明法(みょうぼう)博士の惟宗允亮(これむねまさすけ)が、諸書から制度・事例を集めて類別したものである。本来 130 卷あったが、26 卷(巻第 22～30, 51, 53～57, 59～62, 67, 69～70, 81～82, 84, 95)が現存している。

疫病に関する事例として、天曆 9 年(955)閏 9 月に、疫病の流行により人民が苦しんでいることから、宮中行事である残菊の宴(ざんぎくのえん)を取りやめたことが記されている。平安時代でも、現代のように世情を見て自粛をしていたことが記録として残っている。

足言入夜訥言俄招清仍向彼亭大臣會合  
 被示任大臣之事也予陳所存退飯了事為  
 永不可出實者  
 任由也  
 雖每晴日之文衆高陽院造紫事不可有懈  
 後復由去詞了頗有納受之氣  
 十八日  
 自己時俄有火急病者病體不得心足午冷  
 腹中苦病極難堪之申位聊落居以律師加  
 護身  
 十九日  
 大臣被來談一日事已以盡其寔之自女院  
 不任大臣者不可療治其瘡之由被責由仍  
 先可存命之由思入卜被仰因之以職更  
 可承之由申之無勅許自女院猶被責甲仰  
 出信清卿早行向可言者大綱言再三辭道  
 猶依仰遂向其宅仰其田仍任大臣託之由

26

明月記 〈附:明月記要目・明月記歌道事類〉

57冊

『明月記』藤原定家記

『明月記歌道事類』一条兼良著

寛文2年(1662)

至延宝9年(1681)奥書 写本

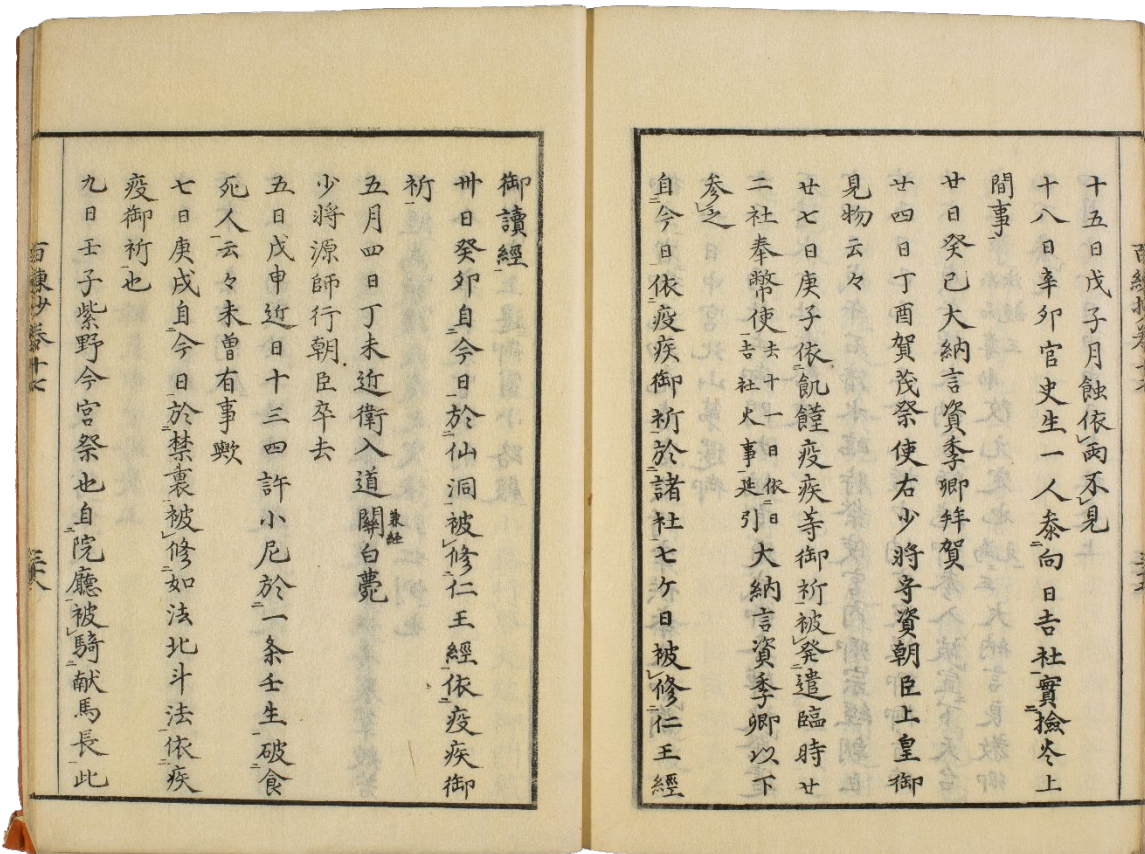
縦26.3×横18.6cm

[請求記号4104-13-W-47]

写字台文庫

『明月記』は、鎌倉時代初期の歌学者藤原定家(1162～1241)の日記である。漢文体で書かれており、治承4年(1180)～嘉禎元年(1235)に至るまでの日記が現存する。日記は、有職方面・政治生活・経済生活・家庭生活など多方面に及んでいて、史料価値も極めて高い。

日本では古くから病氣治療は呪術に依存していたが、それは鎌倉時代になっても変わることなく続いた。例えば元久元年(1205)6月18日の条には、病の悪化を防ぐために定家が僧侶から護身を受けていたことが記されており、この他にも護身を受けていた記事が幾つかある。



27

百練抄 (又名百鍊抄)

17 卷 14 冊

享和 3 年(1803)跋

刊本

縦 26.3× 横 19.0 cm

[請求記号 410-115-W-14]

『百練抄』は、鎌倉時代末期に成立した編年体の通史である。編者は未詳。全17巻の内、第1巻から3巻までを欠く。冷泉天皇から後深草天皇までの時代(10世紀後半～13世紀前半頃)を収めている。

後深草天皇の正元元年(1259)4月27日、飢饉や疫病のため、朝廷が格別の崇敬をする稻荷神社などの所謂二十二社に奉幣使を遣わして、7日間『仁王経』を読経させたとある。続けて5月7日には、禁裏に於いて、疫病平癒のために北斗法が執り行われており、当時疫病が流行って治まらなかったことがかかえる。



後天保... 利... 徳川家康から家齊までの約300年間の行事・事件・事変などが詳しく記されている。  
 疫病についても、享和2年(1802)2月から4月にかけて、現在で言うところの流行性感冒が諸国に蔓延したため、幕府は、仕えている武士などには薬湯を与え、町家の貧民には御救として米や銭を与えたことが書かれており、医学的な対策や経済的な救済策を行っていたことが分かる。

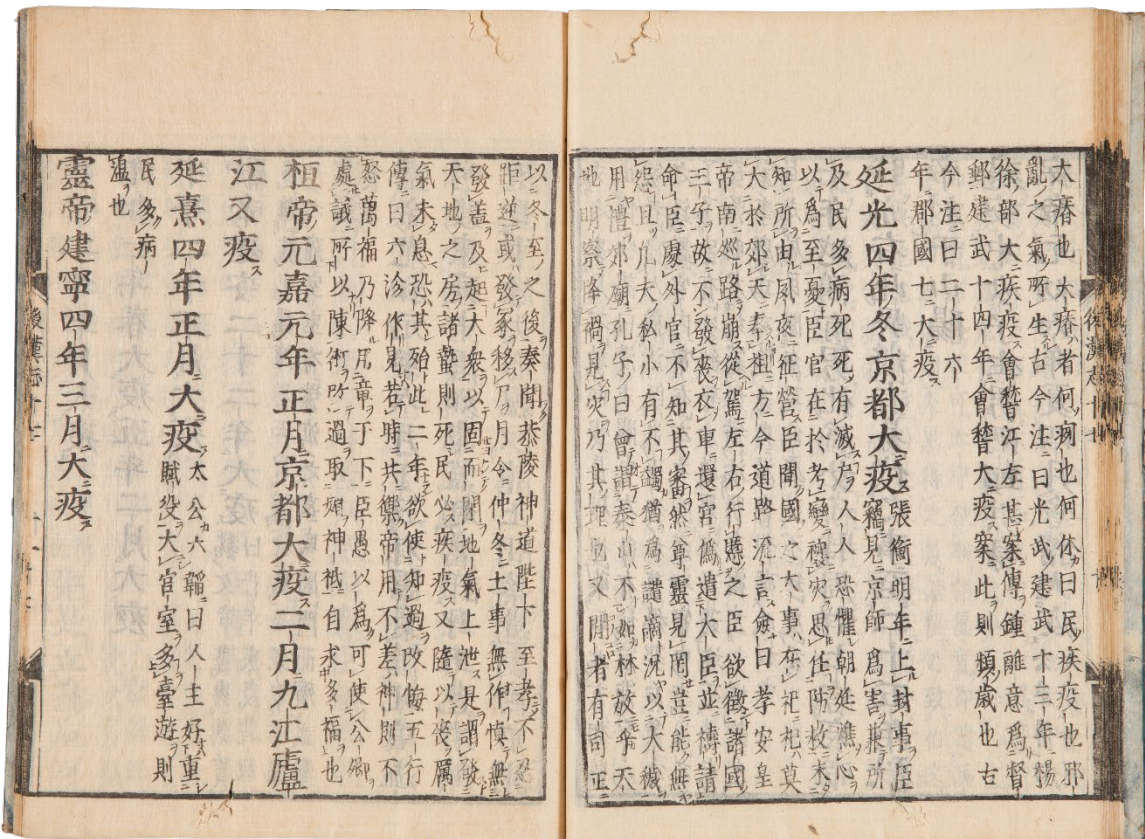
四月... 六月... 諸國... 徳川家... 利... 徳川家康から家齊までの約300年間の行事・事件・事変などが詳しく記されている。

29 泰平年表

7巻7冊  
 忍屋隠士(大野広城)輯  
 縦26.4×横18.5cm  
 [請求記号410.6-36W-7]  
 写字台文庫

『泰平年表』は、国学者である大野広城(1797~1841)が編輯した年代記である。徳川家康から家齊までの約300年間の行事・事件・事変などが詳しく記されている。

疫病についても、享和2年(1802)2月から4月にかけて、現在で言うところの流行性感冒が諸国に蔓延したため、幕府は、仕えている武士などには薬湯を与え、町家の貧民には御救として米や銭を与えたことが書かれており、医学的な対策や経済的な救済策を行っていたことが分かる。



30

後漢書

90 卷 附統漢志 30 卷

目錄 1 卷 61 冊

(劉宋) 范曄撰 (唐) 李賢注

統漢志 (晉) 司馬彪撰

(梁) 劉昭注 明曆 3 年(1657)

林(出雲寺)和泉掾刊

縦 26.2× 横 19.5 cm

[請求記号 422.021-8W-61]

『後漢書』は、中国後漢時代(25～220)を記した歴史書であり、正史の1つである。

『後漢書』には、この時代の後半以降、たびたび疫病流行に見舞われたことが記されているが、中国とローマで疫病流行の平行現象が見られるとの指摘があり、東西交通路の開設などにより、インドを疫病的発源地として、インドから西はローマ、東は中国に至るパンデミックがあったとする説がある。

見紹興陰與紹通傳講表曰曹公天下之雄也必能興霸道繼桓文之功者也今乃釋近而就遠如有一朝之急遥望漠北之救不亦難乎表不從備年六十四以壽終于武陵公聞而哀傷及平荆州自臨江而迎喪改葬于江陵表為先賢也

益州牧劉璋始受徵役遣兵給軍十一月孫權為討攻合肥公自江陵征備至巴丘遣張意救合肥權聞意至乃走公至赤壁與備戰不利於是大疫吏士多死者乃引軍還備遂存荆州江南諸郡

山陽公載記曰公船艦為備所燒引軍從華容

步歸遇泥濘道不通天又大風悉使羸兵負艸填之騎乃得過羸兵為人馬所踏藉陷泥中死者甚衆軍既得出公大喜諸將問之公曰劉備吾儔也但得諄少暇向使早放火吾徒無類矣備尋亦放火而無所及孫盛異同評曰案吳志劉備先破公軍然後權攻合肥而此記云權先攻合肥後有赤壁之事二者不同吳志為是

十四年春二月軍至譙作輜舟治水軍秋七月自渦入淮出肥水軍合肥辛未令曰自頃已來耳數征行或遇渡氣吏士死公不歸家室怨曠百姓流離而仁

三國志 魏書 太祖

31 三國志

65卷 40冊  
 (晉)陳壽撰  
 (南朝宋)裴松之集註  
 (明)陳仁錫評閱  
 (日)田中屨 (止邱)訓点  
 寛文 10年(1670)  
 浪華 洪川清右衛門  
 松村久兵衛刊  
 縦 26.2×横 18.0 cm  
 [請求記号 422.021-1W-40]

『三國志』は、中国三国時代について記した歴史書であり、後漢時代末の混乱期から、魏・呉・蜀の三国鼎立を経て、西晋による中国統一までを扱っている。

疫病の流行は、この時代にも大きな影響を与えていた。例えば、曹操軍と孫權・劉備の連合軍が戦った赤壁の戦いはよく知られているが、「魏書」武帝紀には、曹操は赤壁で劉備と戦ったが、疫病が流行して官吏士卒が多く亡くなったため撤退したとある。

### 第三章 病と文学

第三章「病と文学」では、病から生まれた物語や病に関連して詠まれた和歌、病について書かれた随筆などの文学作品を紹介します。

In chapter three “Sickness and Literature,” literary works such as waka poetries and essays sung or written on the occasion of encountering sickness are introduced.





万葉集（又名万葉和歌集）

20 卷 20 冊

宝永6年(1709)

出雲寺(林)和泉掾刊

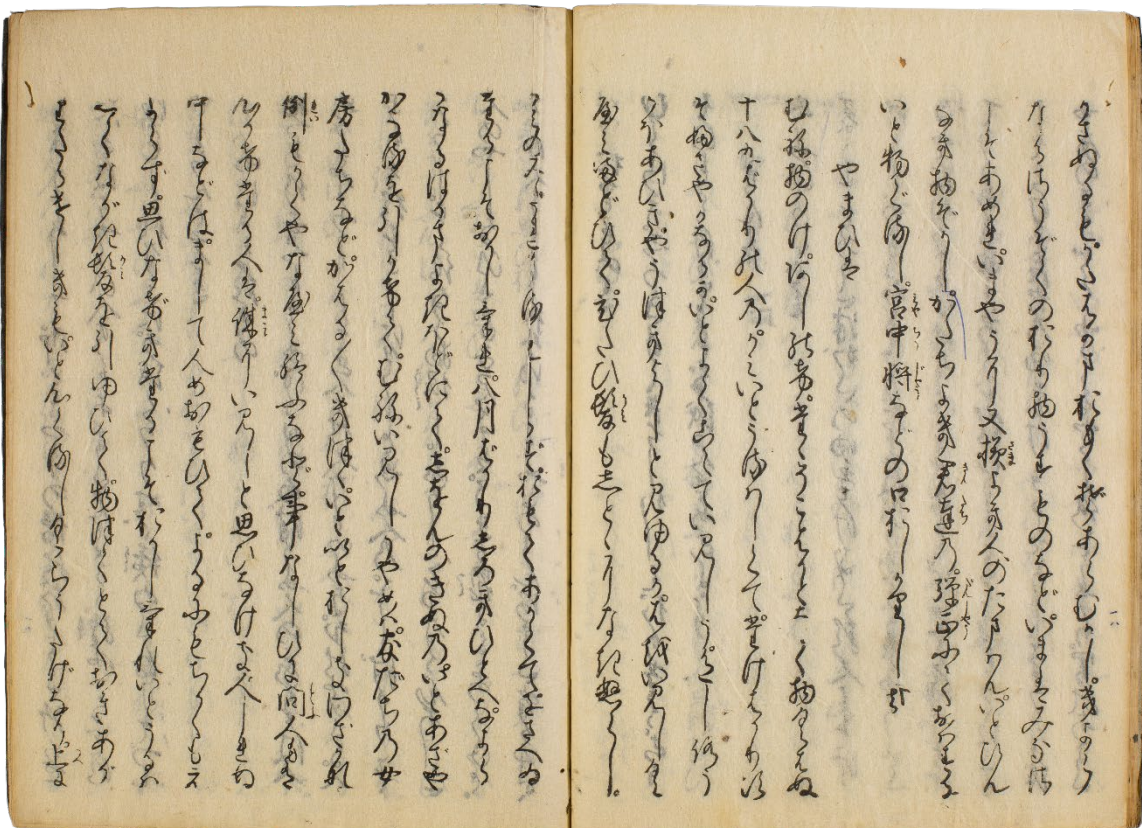
縦 25.5×横 18.8 cm

[請求記号 911.22-12W-20]

写字台文庫

『万葉集』は、奈良時代の歌集であり、天皇から乞食者(ほがいびと)など幅広い階層の人々が詠んだ歌を約4,500首収めている。

詠まれた歌の中には、病に関する歌もあり、15巻には、新羅(しらぎ)に派遣された雪連宅満(ゆきのむらじやかまる)の病死について、同僚の一人が詠んだ挽歌があり、鬼病(きびょう)により、道半ばで倒れ、新羅へ辿り着けず、故郷にも帰れず、岩が根を張る壹岐の島で永遠に眠ることになった宅満を悼んでいる。



33

枕草子 (又名清少納言)

7卷 7冊

清少納言著

慶安2年(1649)

京都深田庄左衛門刊

縦 25.9 × 横 18.9 cm

[請求記号 914.3-33W-7]

『枕草子』は、平安時代中期の歌人清少納言(生卒年不詳)による随筆である。中宮定子に仕えていた頃の回想や日常生活や四季の観察など鋭い感覚で描かれている。

第 183 段は、病について書かれているが、ここに書かれている病は、疫病などの恐ろしい病ではなく、文芸作品において、魅力的な人物の境遇や内面を反映しつつ同情的・美的に描写し得る病であり、違った視点で病が扱われている。



### 34 源氏画

3 卷

狩野探信筆

江戸時代後期写

絹本

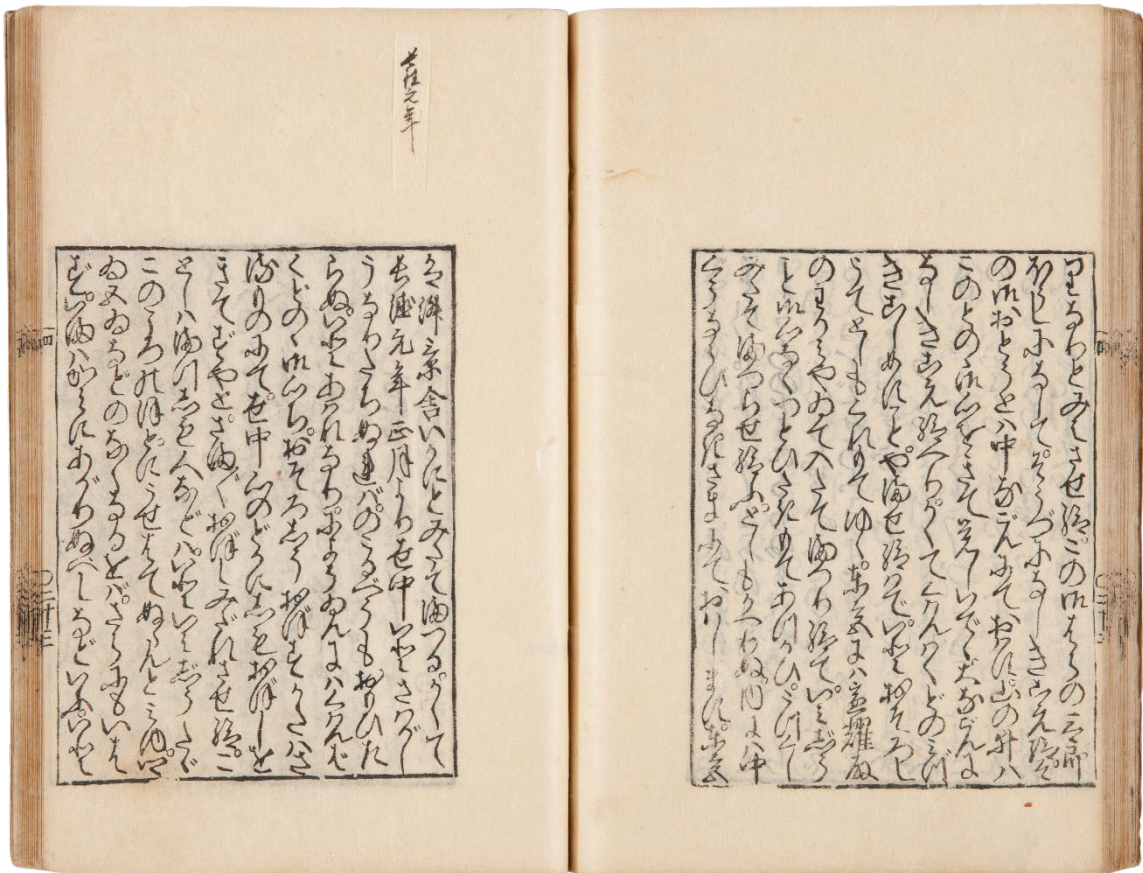
縦 320×横 338.0 cm

[請求記号 021.1-188-3]

「源氏画」は、『源氏物語』の前半部分にあたる桐壺巻から蓬生巻まで各帖一場面を描いた絵巻物で、3巻で合計15図あり、典雅で開放感のある絵になっている。

『源氏物語』には、病が関係する場面が幾つかある。例えば、若紫巻では、わらわやみ(マalariaとされる)を患った光源氏が、その治療の間に、伴侶となる紫の上に出会う。その他、夕顔巻では、夕顔の急死に寝込んでしまう源氏を見舞う頭中将に、源氏がしはぶきやみ(流行性感冒)を欠勤の言い訳にしている。

華やかな「源氏画」であるが、病のことも踏まえて見ると、また違った味わいが生まれてくるのではないだろうか。



35

栄花物語

40 卷 21 冊

明暦 2 年(1657)

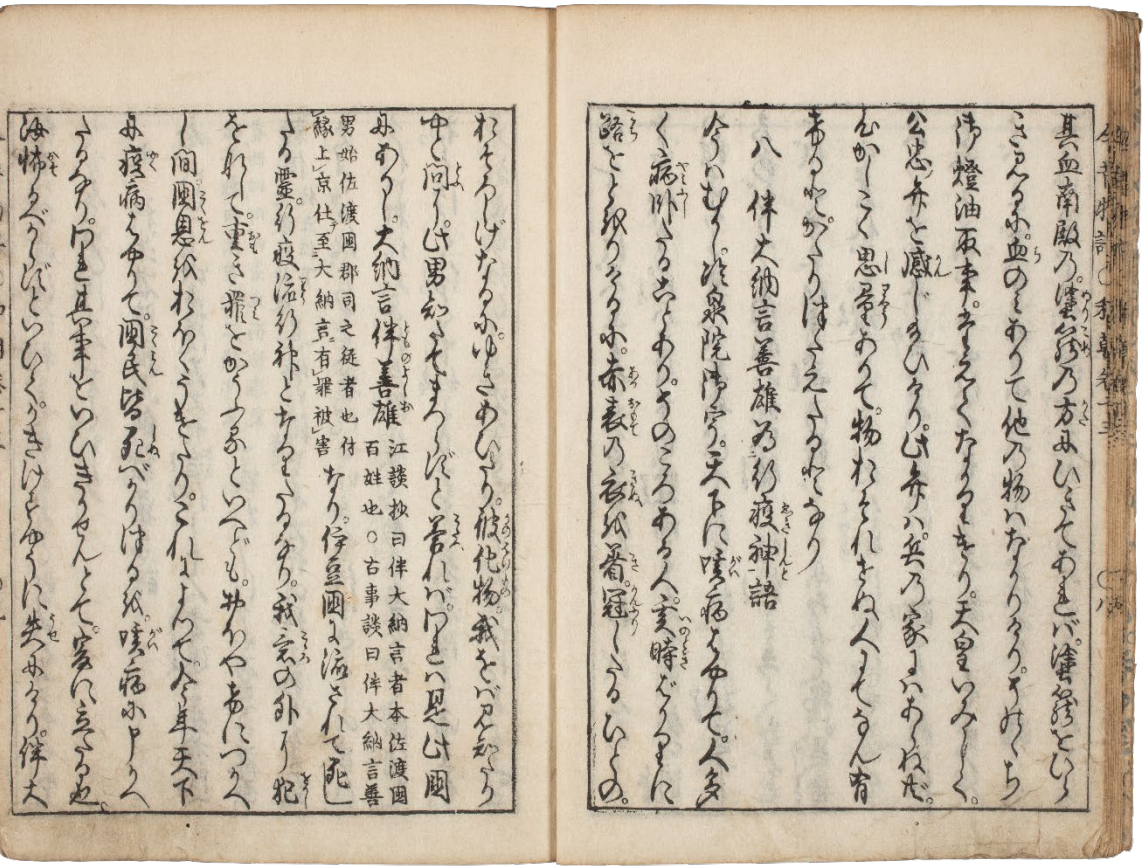
林和泉掾刊

縦 18.9× 横 13.3 cm

[請求記号 913.392-9W-21]

『栄花物語』は、平安時代の歴史物語であり、宇多天皇から堀河天皇までの約 200 年間の歴史を、仮名文の編年体で記している。

内容が物語性を重視するあまり、史実との齟齬が多いとされる。しかし、史実である長徳元年(995)の疫病の流行について、「正月から疫病の流行が甚だしく、人々は生きた心地もない有様であった。(中略)今年は下人等皆死に絶えてしまうかと思われた。四位五位の人達は勿論、その上の公卿(くぎょう)達に迄及びぶであろうという事であった。…」とあり、物語とはいえ、当時の世情不安を如実に伝えている。



36

今昔物語(又名和朝今昔物語・考訂今昔物語)

前編 15 卷 後編 15 卷

10 冊

井沢長秀(蟠龍子)考訂纂註

前編 享保 6 年(1721)

平安柳枝軒茨城多左衛門刊

後編 享保 18 年(1733)

江府小川彦九郎等刊

絵入

縦 22.5× 横 15.9 cm

[請求記号 913.37-34W-10]

『今昔物語』は平安後期の説話集である。12 世紀初めごろに成立されたとされる。インド・中国・日本の3部に大別して千余編の説話を収めており、近代文学にも大きな影響を与えた。本資料は、日本の説話のみを選んで刊行したものである。

疫病に関連した説話もあり、応天門の変で流罪となった伴大納言の霊が行疫流行神(ぎょうやくるぎょうじん)となったが、国から受けた恩のため、悪性の疾病で人々が死ぬ所を代わりに咳病(かいびょう)の流行で済ませたという説話には、不業の死を遂げた人物が、行疫流行神になると信じられていたことが背景にある。



37

源平盛衰記

48 卷 12 冊

宝永 4 年(1707)

辻三郎兵衛等刊

縦 132×横 19.4 cm

[請求記号 913.4-2W-12]

写字台文庫

『源平盛衰記』は、軍記物語『平家物語』の異本であり、読本系統に分類される。応保年間から寿永年間(1161～1183)までの源氏・平氏の盛衰興亡を詳しく叙述している。本資料には、挿絵が施されている。

平清盛は熱病により最後を迎えるが、東大寺や興福寺を焼いた仏罰とされていた。挿絵にも水風呂が湯気となりその中で苦しむ清盛が描かれている。近年では、この熱病がマラリアではないかという説がある。



38

徒然草

2卷 2冊

兼好法師著

元文2年(1737)

京都菊屋喜兵衛刊

縦 27.2×横 19.1 cm

[請求記号 022-739-2]

『徒然草』は、鎌倉時代末期、歌人であった兼好法師(1283～1352)が著した随筆である。随筆は244段あり、無常観に基づく鋭い人生観、世相観、美意識などが見られる。

第129段には、人や動物を苦しめてはいけないとして、体を傷つけられるより、心を痛めつけられる方が、人の心は傷が深くなってしまうのだとしている。そして、病気になる時も多くは心の悩みであって、外から来る病は少ないと、兼好独自の病気に関する見解も述べている。





マ  
ラ  
リ  
ヤ

日本人は、自分の住んでゐる土地が一番の健康地と考へてゐるらしい。だから、私が上海へ行つても、臺灣へ行つても、氣候が暑いとか、病氣が多いからとかいつて用心しろといふ。同情してくれるのは有難いが、度を超えれば有難くない。私の身は金剛不壊でない。時に病氣することもあるが、決して弱い方ではない。これを知つていふのは、行く先の風土、健康状態を憂ふるのだ。

臺灣にはマラリヤがないワケでない。併し、決して恐るる所ではないのだ。明治廿八年から大正へかけて、各種の傳染病が盛んだったことを知つて、昭和年度に傳染病

の著しく減つたことを知らないのだ。

昭和になつてから各種傳染病を合せて死亡四百人前後、その半數は腸チフス。人口四百五十萬に對して一部分の一にすぎぬ。しかも腸チフスの患者は概内地人である。内地人は魚肉の刺身を喰ふが、これを洗ふ水が悪い。風呂も湯で洗へばいいが、それをしないのが原因だ。豫防注射も服薬もしないで、病の責任を土地に轉嫁するのは無理である。大部分は自分の不注意からのことだ。

私は過去二十年、毎年豫防注射をしてゐる。警戒さへしたら異郷でも健康である。臺灣を旅行するには先づ行く先の水を調べ、若し不良ならば良水を持つてゆく。

マラリヤは、農業に於て危険なとはいはぬ。しかし、蚊帳を使へば六七割は防止できる。現在、これに罹るものは大半蚊帳を使はぬものだ。といふと、笑ふものがあるか知らんが、事實、到るところに蚊帳を使はぬものがある。内地のやうに夏だけ蚊

40  
光瑞縦横談

1冊

大谷光瑞著

昭和11年(1936)

実業之日本社発行

縦 19.1×横 13.3 cm

[請求記号 091-179-1]

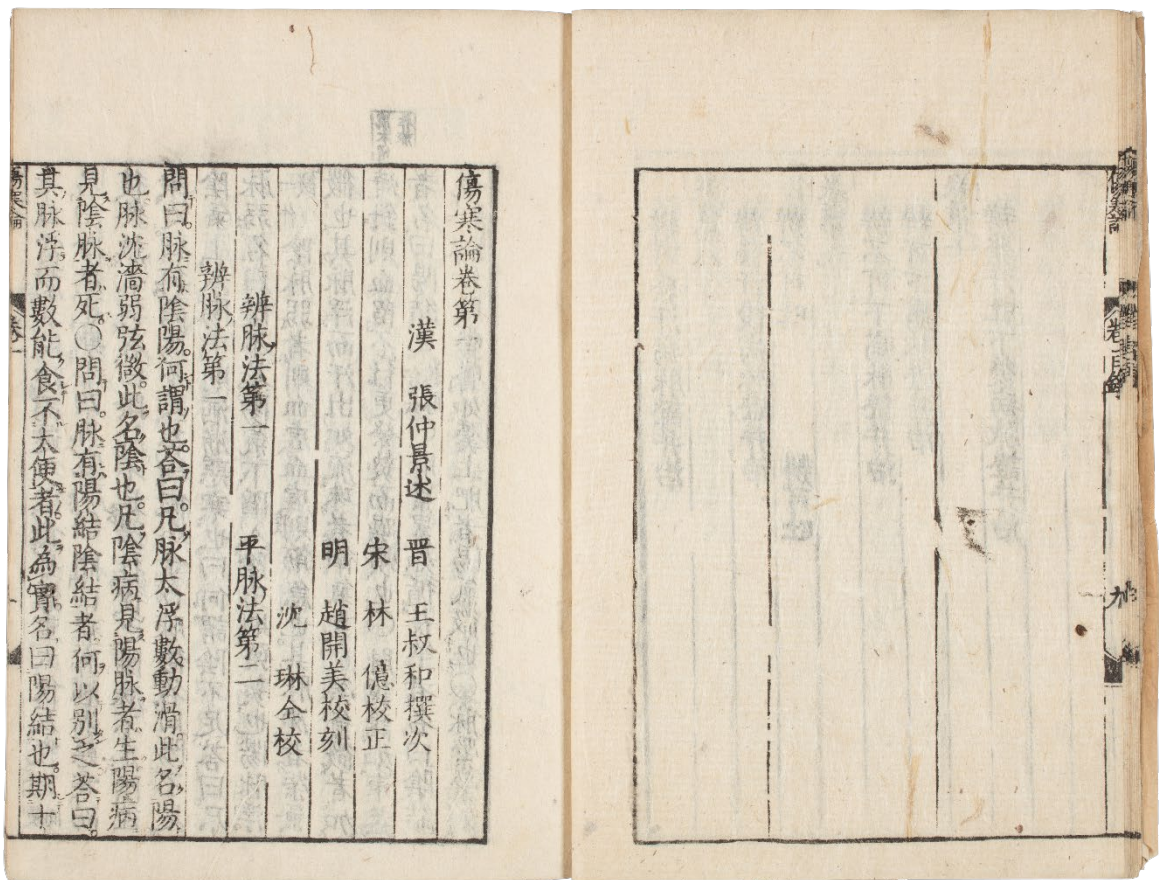
『光瑞縦横談』は、西本願寺第22代宗主大谷光瑞(1876~1948)が、昭和11年元旦から約2ヶ月読売新聞紙上に連載したエッセイを書籍化したものである。

エッセイの内容は、宗教から政治・産業・自然・食など幅広い分野に及んでいる。その中には、当時、日本が台湾など南方へ進出していたことから、マラリアについて書かれたものもあり、病の責任を土地に転嫁するのではなく、病の大部分は自身の不注意から起きているといった見解を述べている。

## 第四章 病と治療

第四章「病と治療」では、伝染病をはじめとするさまざまな病の治療について書かれた書物の他、病の治療の礎となる人体の仕組みについての書物や薬草などについて記された本草書などを取り上げ、昔の人々の病に対する研究の成果について紹介します。

In chapter four “Sickness and Treatment,” medical treatment books on various sicknesses including infectious disease and texts on the human body system and medical herbs which consist of the foundation to medical treatment are exhibited. In this chapter, we take up the knowledge and research results in the old days.



41  
傷寒論

10 卷 2 冊  
 (漢)張機(仲景)述  
 (晉)王叔和撰次  
 (宋)林億等校正  
 (明)沈琳校  
 山本長兵衛刊  
 縦 25.8×横 18.4 cm  
 [請求記号 690.9-454W-2]  
 写字台文庫

『傷寒論』は、後漢末に長沙(湖南省)の太守であった張仲景(150 頃～219)が、当時疫病(傷寒病)の流行によって、200 人余りいた宗族の内、3分の2を失ったことにより、治療法を研究し、『傷寒雜病論(しょうかんざつびょうろん)』を作ったことに始まるとされている。『傷寒雜病論』は、古くから散逸と発見を繰り返し、現在では、『傷寒論』(急性熱性病)と『金匱要略(きんぎょうりやく)』(慢性病)の2部に分かれて伝えられ、『黄帝内径』と合わせて中国医学の三大古典とされている。

因みに『傷寒論』は日本にも伝わり、江戸時代には、特に、経験・実証を方法論とし、唐代以前の医学に依拠することを唱えた古方派の医師によって聖典視された。

柴胡加芒硝湯 桂枝加桂湯

附子瀉心湯 柴胡桂枝湯

甘草瀉心湯 生薑瀉心湯

黃芩加半夏生薑湯

桂枝加大黃湯 桂枝加芍藥湯

四逆加吳茱萸生薑湯

四逆加人參湯 四逆加猪膽汁湯

已上計方一百一十二道

附錄 一條

傷寒論國字解卷之一

皇都 雲林院了作註解

淡海 門人 橋本正隆筆授

傷寒雜病論集

雜ノ字一本ニ卒ニ作ルルノ病ニ寒ニ傷ラル、ヨリ起モノ多シ故ニ寒ニ傷ラル、ヨリ起テ論ヲ立テ

論曰

傷寒論ヲ著述ノ所ニ以テ論ヲ曰聞サシ

越人入

號之診 姓ハ秦名ハ越人扁鵲ト号ス

秦越人

扁鵲ノ傳ナドヲ歴覽シ玉フナリ

號之

扁鵲ノ號ト云フナリ

診

扁鵲ノ診ト云フナリ

扁鵲

扁鵲ノ名ト云フナリ

傷寒論國字解

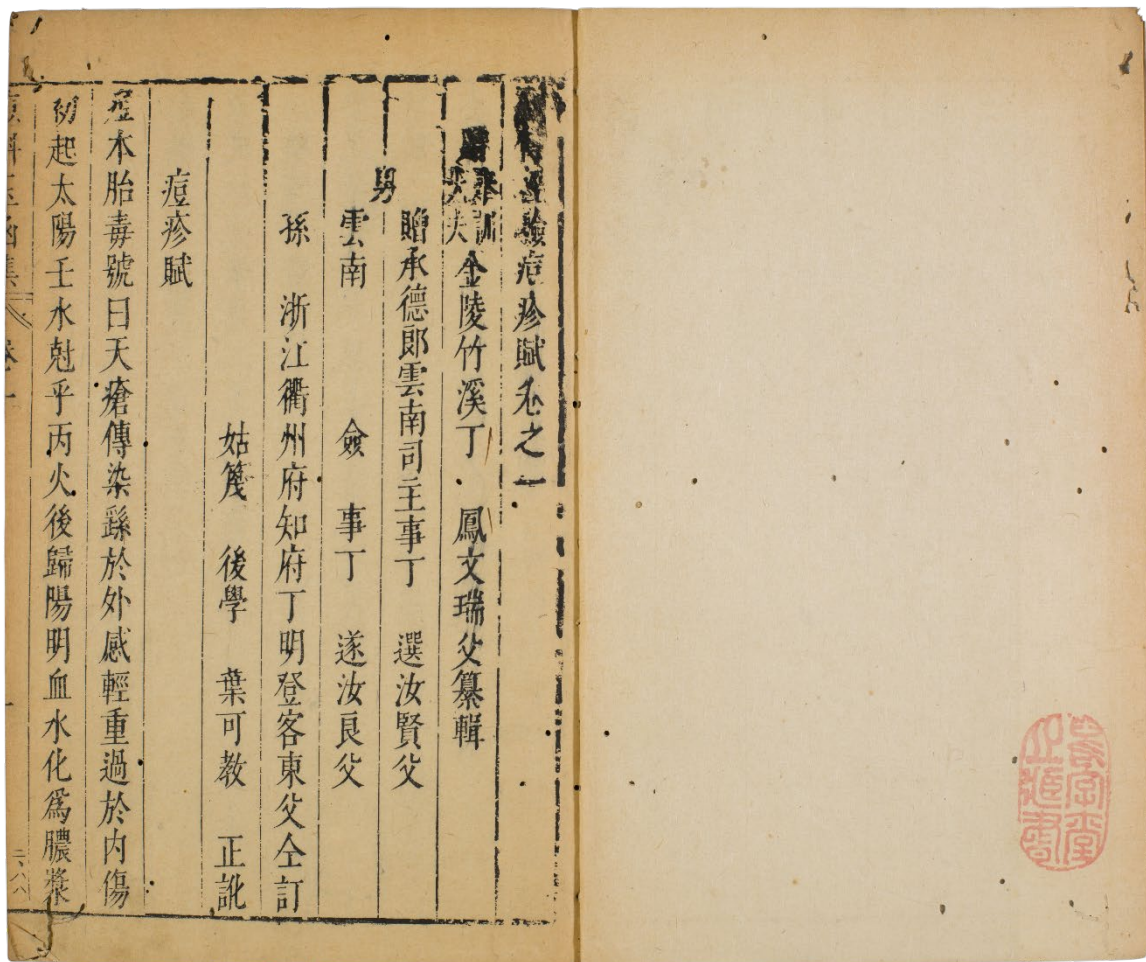
卷之一

42 傷寒論国字解

10卷 附録1卷 6冊  
雲林院(古野)了作註解  
橋本正隆筆授  
明和8年(1771)  
浪花宝文堂  
大野木市兵衛等刊  
縦22.7×横16.0cm  
[請求記号 690.9-452W-6]  
写字台文庫

『傷寒論』は、治療の原則とその原則に従っての治療処方と応用の仕方について、分かりやすく明確に述べた医学書として評価された。日本にも広まり、『傷寒論』に関する著述が約600部に及んだとされている。

『傷寒論国字解』もその一つであり、雲林院了作一門の初学者向けに作られた注釈書である。『傷寒論』の語句について、理解しやすいように語句ごとに註釈が施されている。



43

秘伝經驗痘疹治法玉函集

8卷 目錄1卷 10冊

(明)丁鳳輯

明万曆10年(1582)序

刊本

縦23.7×横15.2cm

[請求記号 690.9-503W-10]

写字台文庫

『秘伝經驗痘疹治法玉函集』は、痘疹(とうしん)(痘瘡(とうそう))に関する医書である。明代後期の医師と思われる丁鳳(生没年未詳)によって編集された。国内で鈔本が確認される他、現存する書籍は僅かである。

本書は、痘瘡の総論にはじまり、形状別の治療法、症状別の治療法、婦人の痘瘡などについて述べられている他、金元四大医家の一人である李東垣(1180~1251)などの痘瘡に関する論についても触れている。

焉。死生存亡虚實判然者。非他證可比也。雖指內經運氣七篇。謂非  
 內經原文。然其文辭古雅。而決非後世膚淺之言。則足以為徵也。近  
 世活幼心法之治方。多補少瀉。痘科鍵之治方。瀉多而補少矣。余忘  
 淺陋。執其中以聚要語。名曰痘疹結要。所謂中者。予莫之中。則有識  
 之士。為我正之。則幸甚。不佞玄順略記其言。且以國字和解之。為序  
 云。明和庚寅孟春平安加藤 懿之書



痘疹結要上

病原

王仲威曰痘疹ノ一證ハ有生ノ初ニモトツク人ノ免カルコト  
 アタハガル所ノ者ナリ  
 桂岩魏直曰痘ノ證タル精血ノ初ニ根ガレテ瀉火ノ後ニ成ル  
 又曰五妙合精血鎔冷シテ藏府皮毛筋骨ノ成ラ成ヌ既ニ成

伊勢 平岡宗安 著  
 平安 加藤玄順 校

44

痘疹結要

3卷 附本邦老医伝1卷1冊

平岡宗安著 加藤玄順校

安永8年(1779)

浪華星文堂

浅野屋弥兵衛等刊

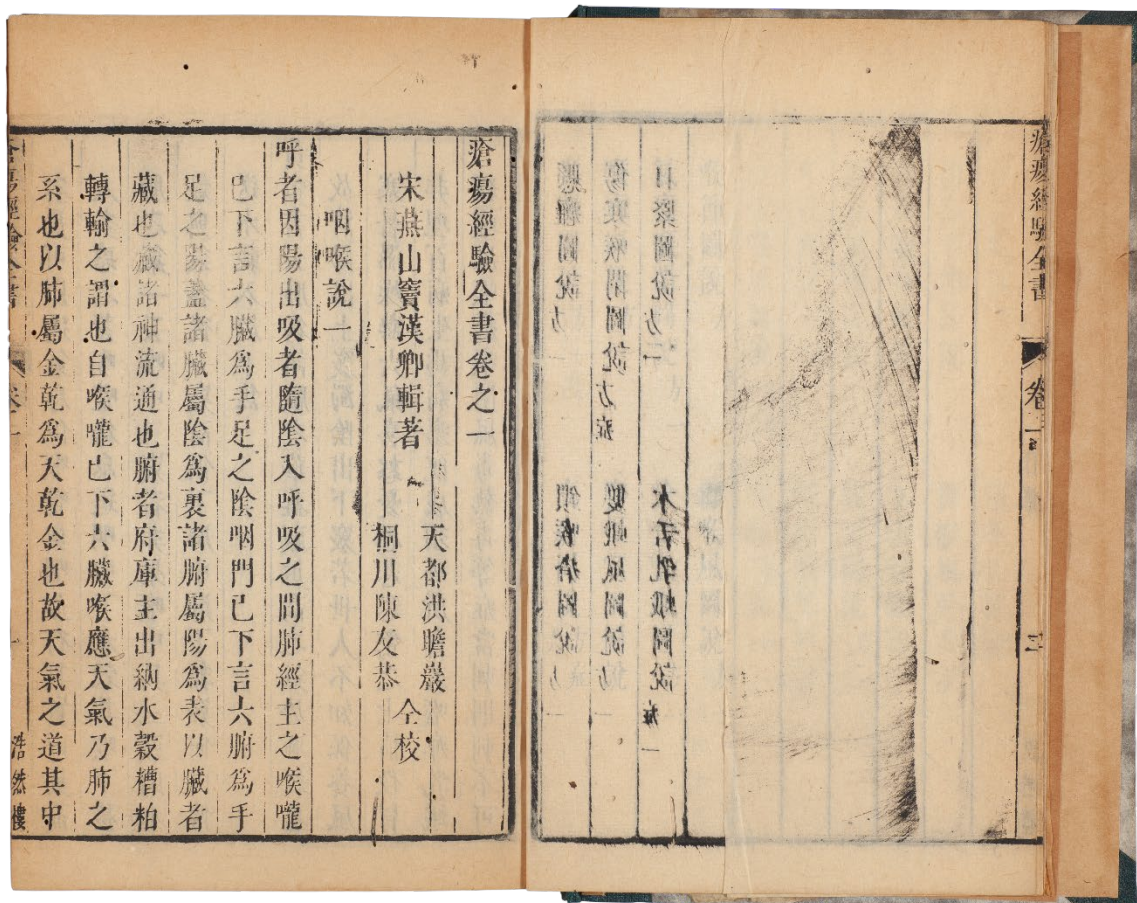
縦18.7×横12.5cm

[請求記号 690.9-514W-1]

写字台文庫

『痘疹結要』は、序文によれば、元文3年(1738)に平岡宗安が著し、その後明和7年(1770)に、医師である加藤玄順(1699～1785)が校訂して分かりやすくしたとある。

本資料は、痘疹について、原因、気の流れ、病的変化、治療法、調薬法などの項目を設け、各項目で中国の医書などを出典にして解説している。



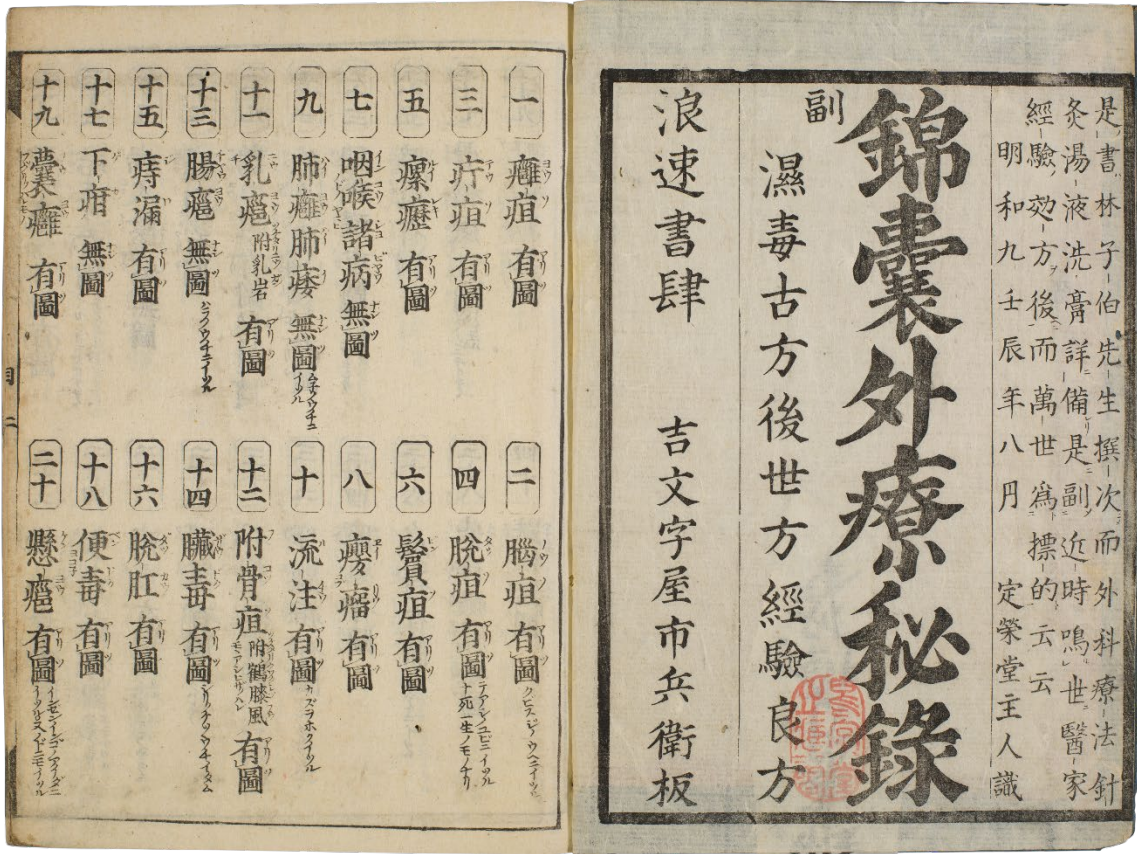
45

瘡瘍經驗全書

13卷 2冊  
 (宋)竇漢卿撰  
 (清)洪瞻巖・陳友恭校  
 清康熙56年(1717)  
 序刊  
 浩然樓藏板  
 縦25.8×横16.5cm  
 [請求記号 690.9-188W-2]  
 写字台文庫

『瘡瘍經驗全書』は、宋末元初の医家・学者であった竇漢卿(1196～1280)が著した外科書である。「瘡瘍(そうしょう)」とは、腫物・できものなどの外科的疾患を意味する言葉である。

本書は、全13巻から成るが、瘡瘍についての論述ばかりではなく、痘瘡(天然痘)や小児雑症などについても取り上げられていて、各病症には、論・図・薬方などが記されている。



錦囊外療秘録

1 卷 附濕毒一切經驗良方  
1 冊

林子伯著

明和9年(1772)

大坂定榮堂

吉文字屋市兵衛等刊

縦 26.2 × 横 18.8 cm

[請求記号 690.9-351W-1]

写字台文庫

『錦囊外療秘録(きんのうがいり)ようひろく』は、江戸時代中期の医者林子伯(生没年未詳)が著した外科治療の医書である。外科治療には、鍼灸と湯液(煎じ薬)などが併用して行われた。

本書には、癰疽(ようそ。悪性のできもの)にはじまり、臓毒(各臓器に蓄積した毒症)・破傷風・耳病・結核などさまざまな病を取り上げ、111 の項目に及び、それぞれの症状について、図などによって解説し、治療法が記されている。



山岡元眠先生著

# 黴瘡療治方

平安書林

青樹堂  
生白堂  
九湖堂  
全梓

黴瘡療治方叙

孔子曰身體髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也余見輕俊子弟動宿花柳之巷染楊梅之諸瘡委之庸

47

## 黴瘡療治方

2卷 2冊

山岡元眠(周急)著

安永8年(1779)

平安青樹堂等刊

縦15.8×横10.9cm

[請求記号 690.9-402W-2]

写字台文庫

『黴瘡療治方』は、梅毒の治療について記した書物である。「黴瘡」(ばいそう)とは梅毒の異称である。梅毒は、15世紀末のスペインやポルトガルによる世界航路の新発見に伴い、世界中に広がったとされる。日本でも16世紀前半には、流行した記録がある。

著者山岡元眠(生没年未詳)が記した題言には、黴瘡について、高貴な人々には患者が少なく、貧しい人々に患者が多い病であり、きちんとした医者に診てもらうことができず、軽くても後遺症が残り、重ければ死に至るため、本書を著し、漢字にはすべて片仮名を付けて、貧しい人々でも処方が読めるようにしたとある。

○卷之七

癰疽 一丁表

疔瘡 六丁ヲ

下疳 七丁表

癩瘡 同上

癰瘡 同上

癩風 十丁ヲ

諸瘡症戒破傷風 十丁ヲ

癩癧 五丁ヲ

便毒 七丁ヲ

楊梅瘡 八丁ヲ

疥瘡 九丁ヲ

癩瘡 九丁ヲ

厲風 十丁ヲ

目錄終

萬病回春病因指南卷之一

浴下

岡本一抱子

撰著

○中風

内經移精變氣論岐伯曰治之極於一帝曰何謂一岐伯曰一者因得之言心ハ一ハ天地ノ至數萬物ノ本根タリ醫ノ病ヲ治スルモ亦一ノ道ニ極ル即病因其ノ道ヲ得也醫トシテ能ク因ヲ得ル者ハ獨視獨聞神ニ通シ變ニ應シ正行ノ間トナク陰陽辨死生明ニ効ヲ得コト止水形ヲ移洪鐘響ヲ答ルカ如シ苟モ病因未詳何ヲ以テ治法ヲ辨セシ古人ノ所謂神聖工巧ハ何ニカアルヤ皆其因ヲ察スヘキノ儲ノミ病因明ナル則ハ治法ヲ要茲ニ著補瀉能施ノ十全ノ効ヲ得ヘシ故ニ余不敏ナレモ竊ニ此集ヲ編テ庸醫昧ノ因ヲ難得者ニ便スルコト如ク先○夫中風ノ病因古今ノ諸

万病回春病因指南

7卷 8冊

岡本一抱子(為竹)著

元禄8年(1695)

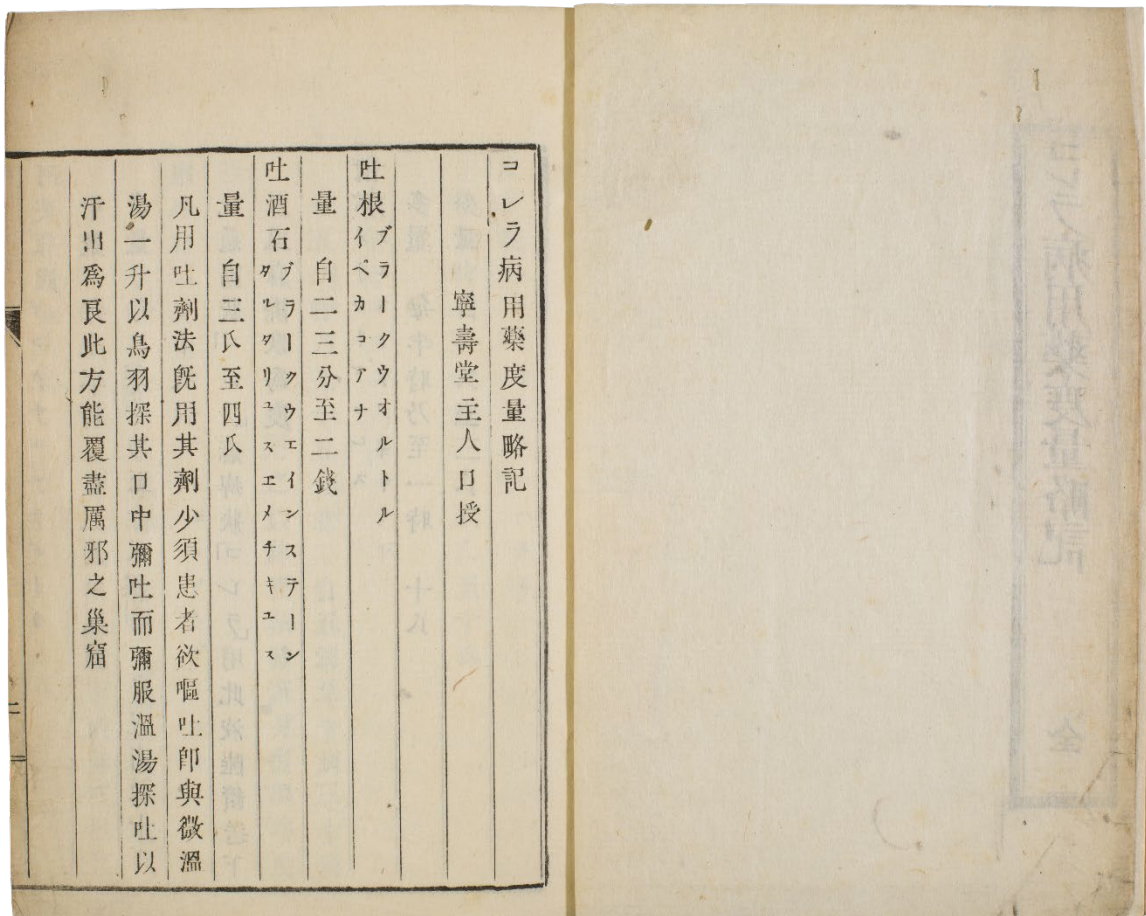
江戸西村半兵衛等刊

縦 22.3×横 15.7 cm

【請求記号 690.9-265W-8】

『万病回春病因指南』は、医師である岡本一抱子(1654～1716)が、江戸時代前期に最もよく読まれた明代の医書『万病回春』の病因病理(病気の原因・過程に関する理論)について詳しく記したものである。

一抱子は、『万病回春病因指南』の凡例で、『万病回春』の病因病理の不足を指摘している。そのため、『万病回春』の本文の注解だけでなく、金元明の医説を合わせた自身の医論も述べている。



49

コレラ病用薬度量略記

1冊

寧壽堂主人口授

安政5年(1858)跋

伊東市右衛門刊

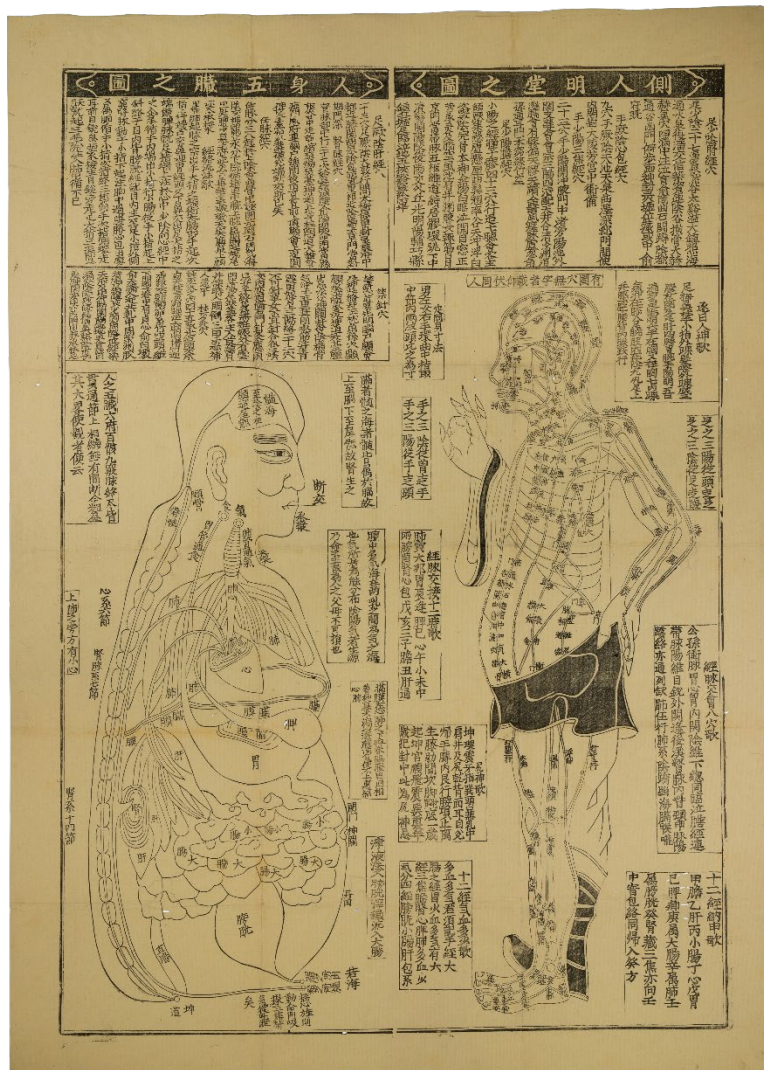
木活字版

縦24.1×横16.4cm

[請求記号 690.9-366W-1]

『コレラ病用薬度量略記』は、コレラに対する治療法や処方について記したものである。口授した寧壽堂主人は、幕末伊勢津藩の藩医であった新宮涼閣(しんぐうりょうかく。1828～1885)と思われる。跋文には、コレラが流行した安政5年に、古書を読んで救う方法を求め、その方法が得られたので、塾生に授けたとある。

因みにコレラは、コレラ菌に汚染された水や食物を口にするにより感染する伝染病である。日本での最初の流行は、江戸時代の文政5年(1822)とされている。コレラの伝染の激しさと急死する率の高さから、恐ろしい奇病として「コロリ」と呼ばれた。その後も、安政5年、文久2年(1862)と流行し、多くの人が命を落とした。

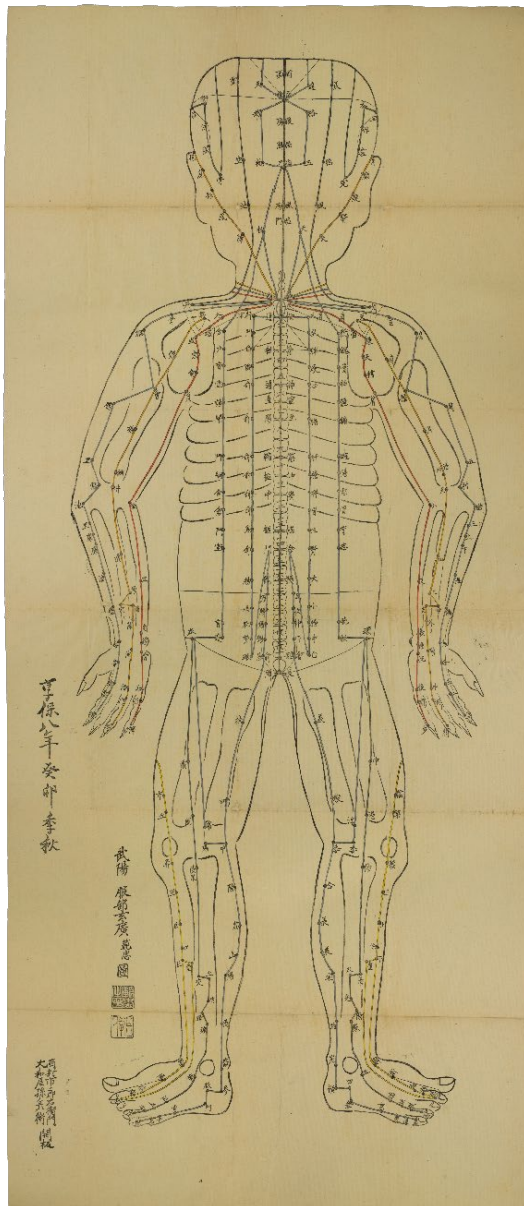


50  
側人明堂之図・人身五臟之図

1 舖  
江戸中期頃刊  
縦 82.1 × 横 59.6 cm  
[請求記号 023.2-55-1/2]

『側人明堂之図・人身五臟之図』は、明代に作られた「側人明堂之図」と「人身五臟之図」がそれぞれ日本に伝わり、合わせて一紙に刊行したものである。

伝統中国医学では、気が流れるルートを経脈といい、各経脈上に針や灸の治療を行う経穴(ツボ)がある。経脈や経穴を描いた人体図を「明堂図」と呼ぶようになった。また、人間の内臓を五臓(肝・心・脾・肺・腎)と六腑(胆・小腸・胃・大腸・膀胱・三焦)から成ると考え、視覚的に理解するために、「人身五臟之図」が作成された。



51

〔背面経脈図〕

1 鋪

服部玄広図

享保8年(1723)

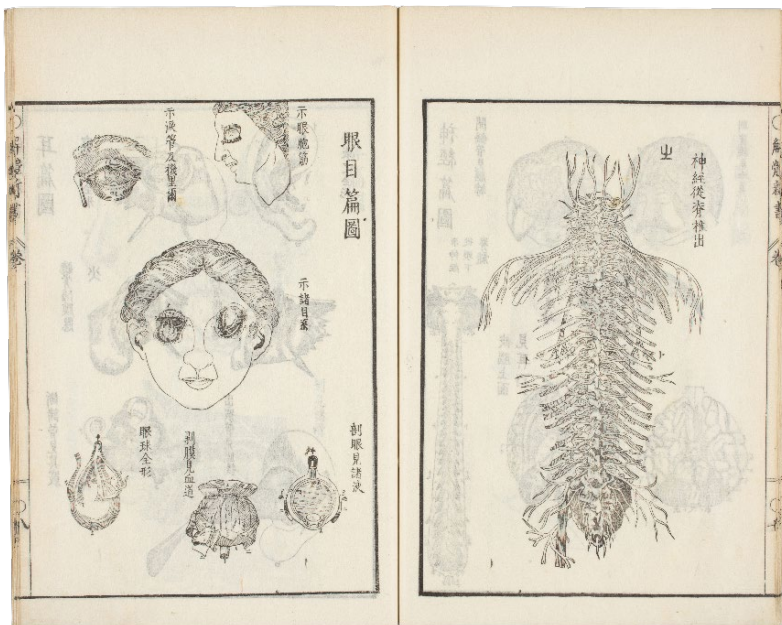
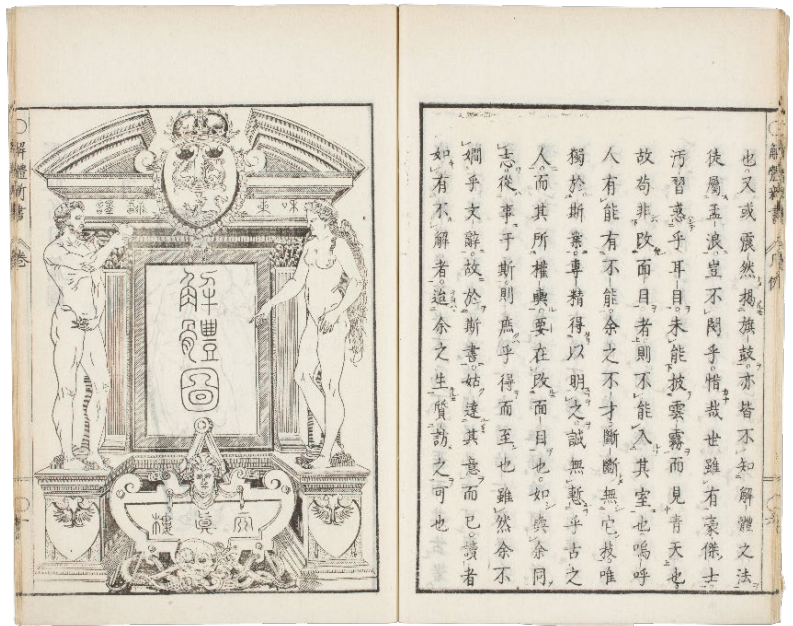
大和屋孫兵衛等刊

縦 135.3×横 58.5 cm

〔請求記号 023.2-55-2/2〕

〔背面経脈図〕は、中国医学に於いて、人体の中の血液や気などの流れる通り道の一つである経脈について記した図である。鍼灸による病の治療などに用いられたと思われ、人体をうつ伏せにした状態でツボなどの位置が示されている。

図を作成した服部玄広(生没年不詳)は、江戸時代中期の享保年間(1716～1736)に活躍した医師・本草学者である。明李時珍の『本草綱目』を訳した『本草和談』などを著した。



52

### 解体新書

4卷序図1巻5冊  
 与般亜单欠兒武思  
 (ヨハン・アダム・クルムス)著  
 杉田玄白訳 中川淳庵等校  
 小田野直武画  
 安永3年(1774)  
 東武須原屋市兵衛刊  
 初版本  
 縦26.8×横18.0cm  
 [請求記号 690.9-356W-5]  
 写字台文庫

『解体新書』は、わが国最初の西洋解剖書の翻訳本である。原典は、ドイツ人ヨハン・アダム・クルムスの『解剖図譜』の蘭訳『ターヘル・アナトミア』であり、本文4巻・附図1巻から成る。内容は、原典の本文だけを訳し、本文の数倍に及ぶ脚注には触れず、28編に細分される。

本書の翻訳・刊行は、一時代を画する偉業として医学史上高く評価され、以後、日本の名医家たちが次々と本書に学び、医学の発達に偉大なる貢献をした貴重な資料である。



53

大谷文書 8097

縦 27.6 × 横 15.8 cm

20 世紀初頭、西本願寺第 22 代宗主大谷光瑞師が、中央アジアに派遣した大谷探検隊は、仏教に関する貴重な経典などを多数将来した。その中には、仏教に限らず、いくつかの本草学(中国の薬物学)関係の文書断片も含まれていた。

8097 番の大谷文書には、消炎薬などに使用される朱砂や黄連などが記されているが、どのように分類されているのかは判然としない。また後半部分には、「五穀部」とあるが、内容から、後世の本草書にみられる分類には合致していない。



54

紹興校定經史証類備急本草

28 卷 24 冊  
 (宋)王繼先等校  
 江戸後期写本  
 縦 26.5×横 18.8 cm  
 [請求記号 021-543-24]  
 写字台文庫

『紹興校定經史証類備急本草』(しょうこうていけいししょうるいびきゅうほんぞう)は、宋代の医師唐慎微(とうしんび。1040?～1120)が作った『大観本草』について、王繼先(おうけいせん。?～1181)らには同書を再校し、自注も加えて紹興 29 年(1159)に進上した。

本資料は、国内では 27 点、国外では大英図書館をはじめ 3 点の所蔵が知られている。龍谷大学所蔵本には 619 葉が載り、うち 510 葉について計 792 の図がある。後人の手がかかり加えられ、錯簡(さっかん)や誤脱もあるが、絵はよく文も多く、内容が豊富な点では伝写本中の善本とされる。





55

本草綱目

52卷 卷首附圖2卷  
 附瀕湖脈學1卷  
 奇經八脈考1卷  
 脈訣考證1卷 40冊  
 (明)李時珍著  
 明萬曆31年(1603)刊  
 縦26.1×横17.1cm  
 [請求記号 694.29-35W-40]

『本草綱目』は、明代の医師で本草学者である李時珍(りじちん。1518~1593)が著した薬学書である。歴代の著作に比べて、分量が最も多く、内容も充実している。因みに収録薬種は1892種、図版1109枚、薬としての処方1096種に及んでいる。万曆23年(1596)に南京で刊行され、幾つもの版を重ねて出版された。

日本には、最初の刊行から数年後には輸入され、日本の本草学に大きな影響を与え、訓点を施した和刻本が長年にわたって刊行された。

本草抜書上

散人元達記

草部第一 此本草抜書ニハ草部ヲ先ニテ  
 テカイヌリイテ時珍カ綱目ニハ金石ヲ先ニセ  
 ノセタツ凡メ草カウツミ困ル中ニツラ別メ  
 石ノクスリハセツテイフトクスリニツ日用  
 トスルモノヲ後ニハゲタリ本ヤノ中ツ抜書  
 ニ病証ヲ抜肩タルハ内経抜書ナリ病症ノ  
 シヲ知ラセシメテ病因ヲ知ラシメテハ内  
 シヌキイメメク薬性ヲシラセシメテハ  
 要語ヲ抜肩スル病因ヲ空ニメ治法ヲホト  
 ナリケテ本ヤ綱目ニハ一藥ニツイテモ  
 イソニミソ干要カトラシヌクコノ抜肩



56 本草摘要講義

2巻 1冊  
 松岡玄達著  
 貞享3年(1686)  
 自筆本  
 縦 23.8×横 17.3 cm  
 [請求記号 694.29-61W-1]

『本草摘要講義』は、江戸時代中期の本  
 草学者松岡玄達(1668～1746)の自筆講義  
 ノートである。本書名は外題より採った。写  
 字台文庫にある他の書物などから推察する  
 と、おそらく医師浅井周伯(1634～1705)の  
 講義を玄達が筆録したものと思われる。

周伯は明・李時珍の『本草綱目』から要  
 点を抜き書きし、薬物の使用頻度順で甘草  
 (かんぞう)～石膏(せっこう)の順に縮成し、  
 『本草抜書』と名づけていた。この書は『本  
 草摘要』とも呼ばれたので、その講義録を玄  
 達が『本草摘要講義』としたのである。

## 龍谷大学大宮図書館所蔵貴重資料特別展「病と生きる」

---

2021年12月24日 発行

---

編集 大木彰  
随念佳博

デザイン 松村千砂子

編集協力 本郷英俊  
池間俊祐

資料撮影 砂原嵩宏  
小池翔平

---

本書の全部または一部を無断で転載・複製することを禁じます。

---

